

IV 関係機関等との連携協力体制の構築に係る取組の報告

I 運営指導委員会

(I) 運営指導委員会の設置

① 運営指導委員会設置要綱の制定

高知商業高等学校における新時代に対応した高等学校改革推進事業の運営に関し、専門的見地から指導、助言及び評価等を行う機関として、運営指導委員会を設置するため、「高知市創造的教育方法実践プログラム運営指導委員会設置要綱」を制定し、高知市創造的教育方法実践プログラム運営指導委員会設置要綱第1条に基づき、高知市創造的教育方法実践プログラム運営指導委員会を設置した。

② 運営指導委員会役員の任命及び委嘱

高知市創造的教育方法実践プログラム運営指導委員会設置要綱に基づき、委員の委嘱及び任命を行った。運営指導委員会役員の期間については、令和4年10月17日から令和5年3月31日までとし、第1回運営指導委員会開催に合わせて、それぞれの役員の任命と委嘱を行った。

③ 運営指導委員会の体制

No.	所属	職名	氏名	依頼方法	備考
1	高知大学 高知大学次世代地域創造センター	特任教授・学長特別補佐 地域DX共創部門 部門長	川村 晶子	委嘱	運営指導委員
2	高知大学次世代地域創造センター	地域DX共創部門	森 和美	委嘱	運営指導委員
3	ファン度レイジング・マーケティング	代表	東 森 歩	任命	運営指導委員
4	高知市教育委員会学校教育課	教育企画監	市原 俊和	任命	運営指導委員
5	高知市教育委員会GIGAスクール推進プロジェクトチーム	情報教育学校支援アドバイザー	岡崎 伸二	任命	運営指導委員
6	高知商業高校	学校長	竹村 晃		
7		教頭	成瀬 孝治		
8		教頭	安岡 孝浩		
9		主幹教諭	掛水 さおり		
10		教諭	山本 昭二		
11		教諭	川崎 愛		
12		事務長	宮田 小町		
13		管理主幹管理担当係長事務取扱	朝倉 壽信		
14	高知市教育委員会学校教育課 高等学校企画政策室	指導主事	久保 智司		
15	高知市教育委員会学校教育課 高等学校企画政策室	指導主事	三嶋 香世		
16					

④ 運営指導委員会が取り組む内容

- 市商地域創造プログラムの開発報告のタイミングで、運営状況、カリキュラム内容、研究成果などによる生徒の変容（失敗から学ぶ力）を協議するとともに、R-PCDA サイクルに基づいた改善策を検討し、カリキュラム開発について提言を行う。

- 市商地域創造プログラムを通して生徒たちの Society5.0 に求められる「失敗から学ぶ力」を中心とする「市商マネジメント力」の獲得状況とそのために必要な最先端の技術を活用した個別最適な学びや教科等横断的なカリキュラムについて分析・評価する。

(2) 第1回運営指導委員会（令和4年10月17日実施）

運営指導委員会の記録

第1回 高知市創造的教育方法実践プログラム運営指導委員会

日 時 令和4年10月17日（月） 16時から17時まで

会 場 高知商業高等学校 校長室

参加者 （運営指導委員会委員）

川村委員長，市原副委員長，森委員，東森委員，岡崎委員
（高知商業高等学校）

竹村校長，成瀬教頭，宮田事務長，朝倉管理主幹管理担当係長事務取扱
山本教諭（情報マネジメント科長），川崎教諭（商業）

（高知市教育委員会学校教育課）

久保指導主事

【報告】

竹村校長： 高知商業高等学校は、創立124年目を迎え、商業高校として、一定の成果を収めてきた。ただし、近年の少子化の問題、学校を取り巻く社会環境の変化により、これまでと同じような学校経営では、やがて没落してしまう。学校経営ビジョンにおいて、0-1チャレンジとして、0から1の道のりは1から100の道のりより険しいということで、生徒・教職員には、常に新しいものにチャレンジしていきこうと伝え、取り組んできた。

その中で、今年7月中旬、正式に文科省の事業の採択を受け、10月17日（月）に情報マネジメント科の授業で本格的に本事業がスタートした。

今、小学校では情報教育が始まり、IT人材の育成が社会全体で謳われている。情報に関する学科として、情報マネジメント科では高資格取得を目標に取り組んで来たが、普通高校においても、情報教育が導入され、商業高校としてどのような教育実践が必要なのかと考えていた。本事業では、情報マネジメント科を中心に、プロジェクションマッピングに取り組む。また、社会マネジメント科、総合マネジメント科も、地域に関わる商品開発や、SDGsの取り組みなど、課題発見解決型の授業を展開しており、その成果物とも最終的には関連させていきたい。

そして、この少子化の中で、いろいろな地域と繋がり、高知県に貢献する人材の育成を考え、高知に残る人材の育成を目指したい。これから高知県の中山間地域を含めた、地方の経済を守っていく人材が本校の人材であると思いついており、この事業がその第一歩になればと考えている。

しかしながら、教科横断的なカリキュラムには、現段階では取り組めておらず、2年目に取り組んでいきたいと考え、現在、英語や数学等の普通教科の教員にも、

スタッフとして関わってもらい、新時代のカリキュラム創造について協議していく。

また、職業高校をはじめ、いろいろな高等学校と繋がり、協働して高知県に貢献する人材育成を図っていければと思っている。

本年度は、手探りの中、プロジェクションマッピングを高知城の追手門で、実施をする予定で進んでいる。

今後、頑張る未来の子供たちを育成し、子供たちの活動する姿を発信したい。令和5年2月15日には、本校の課題研究発表会で、この創造的教育方法実践プログラムの発表も行い、皆様にも評価していただきたい。

令和4年度は、高知城プロジェクションマッピングで情報発信を行い、令和5年度は横断的なカリキュラムの実証分析、そして、令和6年度はカリキュラムの完成を目指す。市商学として学校設定科目を設け、市商学において各教科が横断的に繋がるように考えている。

成瀬教頭： 活動の評価方法としては、後程説明があるが、本校が定める市商マネジメント力の七つの力を生徒に身に付けさせたい資質・能力とし、評価方法を考え実証していく。市商マネジメント力とは、①失敗から学ぶ②コミュニケーション力③課題発見・課題解決力④プレゼンテーション力⑤講義理解力⑥ICT・英語活用力⑦察する力である。

令和4年度は、情報マネジメント課2年のマルチメディアと3年の課題研究、社会マネジメント科3年の広告の販売促進の授業で取り組む。社会マネジメント課の課題研究、総合マネジメント科の課題研究では、現在の取り組みを継続して取り組むことによって授業評価をしていく。

川崎教諭： カリキュラム開発では、情報マネジメント科2年生のマルチメディアの授業で日曜市のアプリの開発を中心に川村先生に協力いただき取り組んでいる。生徒の思考力を高めるための活動として計画を立てている。この事業にあたって、2年生も来年再来年度と継続していくことを考えると、3年生と一緒に活動する場面があるとよいと考え、2年生と3年生と一緒に活動するカリキュラムを考えている。

2年生も、プロジェクションマッピング映像を作成したり、3年生から2年生に教えるような体制が取ればよいと思い、今年のカリキュラムも含めて来年度以降の計画に入れていきたい。3年生の活動から、情報マネジメント科だけではなく各教科、各学科・コースで横断的にできるものを探り、来年度以降のカリキュラムを考えたい。

山本教諭： 情報マネジメント科3年生の課題研究では、プロジェクションマッピングの制作のため、コーディネーターの協力をいただきながら計画を立て進めている。

生徒への本プロジェクトの概要説明では、次年度へ活動が継続されるように2年生にも参加してもらった。本日の授業から、グループワークでのアイデア出しからスタートした。限られた時間の中で、プロジェクションマッピングの制作を全員が取り組むということで、掛川西高校の具体的な製作方法等の指導を受け、実践をしていく。

成瀬教頭： 本事業では、市商マネジメント力の育成を掲げており、事業開始時と終了時に、アンケートの実施を予定している。今の時点で自己評価をし、活動を通して身に付いた力の変化を見ていきたい。この間を埋めるように、個々の活動についてルーブリック評価で見ていく。

久保指導主事： ルーブリック評価は、七つの市商マネジメント力のそれぞれについてルーブリック表を作成し生徒自身がその変容を知るために活用していく。

【意見内容】

竹村校長： 文科省からの指摘評価委員会からは、本校の実施計画について、教科横断的な学びのカリキュラム開発の見通しが無い、育成したい資質・能力についての評価方法が明確でない、他校の高校教育改革のモデルとなるよう再現可能な仕組みの提案や開発課程が必要であり、商業高校だからできたとならないようにしてほしいと指摘されている。

川村委員長： プロジェクトマッピングをやるのが目的なのか。AI もそうだが、今の社会で必要な力は、ハウツーや技術も大切だが、ハウツーから始まるのではなく、誰でもが順番になったらできるということで仕事をしているのではない。なぜそんな技術を使うのか、DX 自体がそうだが、デジタルトランスフォーメーションというのは、様々な技術であり、これは新しいものだけではなく、今までに開発されたビジネスも組み合わせて、私たちが幸せに豊かに生きていくためにどういう技術を使うのかである。

一番大切なのは、「何のためにそれをやるか」である。それが無い状態で進んできたので日本経済は、今このようになっている。文科省も、今の学習新指導要領で、思考力・判断力・表現力は、何のためにやるのかということを中心に考えて、GIGA スクール技術を使い人と繋がっていくことに転換し、そこで、自分で深く考え続け、学び続ける力を修得していくことが大切である。

今、一緒にカリキュラムを作ろうとしている日曜市の学習は、ソフトを作ることやAI を使うことが第1 目的ではなく、日曜市を未来に向けてどう変えていくのか、そのために、今の最新の技術をどのように取り込んで、マーケティングをしていくことを考えている。

そこで、プロジェクトマッピングは、技術の修得も大切であるが、今の段階で一番大切なのは何のためにそのプロジェクトマッピングをやるのかということである。単純にワークショップをやってしまうと、写真を写したり見映えだけにこだわったり、全く深くならない。そこを深くするための教科横断である。もちろん来年度きちんとカリキュラムを設計していくことが大切なことであるが、今までに生徒たちが、小学校の時から習ってきた教科の知識を横断させて、考えることができないならば、力を付けたかどうかというところで、本当に社会に必要な力かどうかという、本質的なところに結び付かないのではないと思う。したがって、ある種の哲学みたいなものがあるのである。私だからこう考えて、何のために誰に見せるために、お城の門を使って、この寒い時期にわざわざやるということも根拠を持ってちゃんと考えないといけない。そうしな

いと、多くの要素の中から、これを映し出すんだ（合理的な思考）、それを自分でちゃんと他の人に納得してもらえら説明の仕方をする（論理的な思考力）ことが必要で、ここが育っていないと、ただ人に話して、インスタで映えるみたいな話になる。これだと就職や進学する力を強化することは難しい。

論理的な根拠を持ってやっている、社会マネジメント課の商品開発であるとか、日曜市への仕掛けも、積み上げてきているものを繋げていくように、整理統合していきたい。

森 委員： プロジェクトとして見たときに、目標は何なのか、それに対してどういうスケジュールがあって、どういう担当者があって、まず、責任者プロジェクト管理者、リーダー、コーディネーターがおり、それぞれの役割が、はっきりしてない。3年間の計画で、その辺りをきちんとしておかないと、おそらく2年目3年目にうまくいかない。文科省からの指摘事項は、一般のプロジェクトにおける、リスクとか、課題になるところである。それをプロジェクトの進捗と内容に合わせて、課題や、リスクに対してどういう対処をするのかは、計画を立てて、それに対してどういうことができたかできてないかっていうのをこのような会議で専門家の意見ももらいながら進めることが重要である。一度その辺りを整理した方が良い。

川崎先生の授業、山本先生の授業を進める中で、授業者は良く分かっていると思うが、委員として、プロジェクト全体を聞いたときには、どう繋がっているのかが分かりにくい。1時間の授業でどういうことを目標にして、どういうことをして、どういう結果が出たのかを分析しないといけないので、ルーブリック表の作成や活用の仕方等を計画しておかなければならない。おそらくそれがカリキュラム設計にも関わってくる。その辺りの整理が必要である。

文科省に提出する資料もあると思うので、普段のプロジェクトを進めていくにあたって、そういうものから準備していると困らないし、全員が共通して向かう方法が決まる。

事前アンケートを実施しているが、1、2、3、4、5の評価について、個人で判断が異なる。生徒たちがどのように捉えて評価しているのかがルーブリック評価になって、子供たちにルーブリックを見せて、自分で今いる位置を分からせて、授業が終わった後、どこまで進んだかという評価になっていくのではないかな。

川村委員長： 事前アンケートには、アウトプットの欄があまりないのだが、評価だけ書かせると、マルを付けて終わってしまう。本当に大切なのは先生が評価するためのものではなくて、探究力は、自らが成長を自覚しないと、学び方を自ら学ぶことはできない。ハウツーは知識的なテストで判断できる。しかし、パフォーマンス評価は難しい。ここをきちっとルーブリックで評価できるものを作成しておかないと子供たちも「こんなのやってられないよ」「面倒くさいだけ」になる。子供たちが、市商マネジメント力の七つの力によって成長を自覚しないとならないので、ここは明確に整理された方がよい。

定義については、今言われているものと比べると古いかもしれない。例えばコ

コミュニケーション力であれば、意思疎通とか話し合いができて、創造的な話し合いができることである。創造的、クリエイティブというのがコミュニケーションである。

プレゼンテーション力であれば、自分の考え方を、相手が納得するように伝え（説得ではない）、相手の行動が変わることがプレゼンテーションである。言うだけ、主張するだけでは意味がなく、一緒に作り上げていくためのプレゼンテーション力、表現力である。

課題発見と課題解決を一つにしてしまうものすごく難しい。これは段階に分けないといけない。まず課題を発見できるか、再定義できるかという言い方をするのだが、これでも難しい。大人が言っていることをそのまま書くことは何にも発見はしてないのである。私だからこそこう解決するのだというのをきちんと自分の言葉で言えなくてはならない。

それを、他の人に話をしたときに、根拠を伴って論理的に話ができたら相手は納得をして、一緒にやるっていう行動を変えることがプレゼンテーション力であるので、そこをきちんと落としておかないと、本人が評価のしようがないと思う。そうでないと何となくマルをしてしまうことになる。それがちゃんと言葉で的確に定義ができていてこそ、進学就職の時の面接や、小論文にも生きてくる。ぜひ検討いただけたらと思う。

東森委員： 本日の授業で、この講座に期待することは何かを問いかけ、生徒に答えてもらった。個人個人の思いを引き出せるようなツールで、今のうちに集約しておいた方がよい。そうすると、プロジェクションマッピングも手段の一つにしかすぎず、プロジェクションマッピング頼みではなく、何のためにするのかを考え、もっと深く、もっと面で広がるものにしていけるのではないかなと感じた。

川村委員長： 学生たちだけではそのテーマに行きつかない場合もあるが、プロジェクションマッピングをやるとしてもそれは手段の一つである。2月のこの時期であるので、当然誰が来るかは何となく予想がつく。そしてそれは誰を何のために呼びたいのかによって変わるのだが、映しますでは、もったいなくて、映したことによって何が変わるのかである。それを見た子供たちが高知商業高校に入りたいと思ったでもよい。それを見た大人たちが高知商業高校を応援したくなくなったでもよい。しかし、そういうことを考えて作らないと、コミュニケーション力やプレゼンテーション力がないということとなり、一方的に好き勝手に作って、内々で盛り上がるだけの質の良くない文化祭のようになってしまう。

今回、公共の場であり、公共の場とは何なのかということをしっかり考えるだけでも随分視点が変わるのではないかと思う。公共の場で映像を映すことがどういうことであるか。社会の中で行われてプロジェクションマッピングも変わってきており、ただ映すではない。

そこも含めて、その当時、最初に出たプロジェクションマッピングの技術のところから、何が変化しているのかみたいなこともちゃんと学んでいくっていうプロセスは、必要だと思う。

市原副委員長： 強烈な目的意識を持って取り組まなければならないなど感じており、教育委員

会として何ができるかを考えたいと思う。

岡崎委員： 論議を聞き、この文科省の指摘を受けながら考えたが、この事業というのは、これまでの知識中心の高等学校、大学共通テストで何点を取るかというところから日本全体を脱却させたいということである。資質・能力をどう生かすのかであるが、資質能力を生かしていくためのノウハウがないというところからこの事業が生まれているとすると、高知商業高校がやらなくてはいけない、ゴールを明確にするということである。逆に言うと、他の高校の先生が知りたいことは何かというと、四つほどあると思う。

一つ目は、高知商業高校は、全教科・全教育課程で資質・能力をどうやって育成していくのか、そのシステムをどのように作ったのかを知りたいのではないかと思う。

二つ目は、そのために、全校の教員がどのように取り組んだのかを知りたい。つまり、タブレットについても、使わない理由の一つは、私の担当する教科がこのタブレットの活用に合わないので使わない。この資質・能力についてやるのは分かるけど、私の教科ではやりようがない。ということではないことを、どう理解して、全授業で取り組むようなカリキュラムなるかを知りたい。

三つ目には、ルーブリックは気持ちの問題ではなく、どのように評価して、どのように行動を変えたかという、あるべき姿をきちんと定義し、行動を定義するということが大切である。

四つ目には、先ほどからお話があったように、プロジェクションマッピングの落ちは何か、その先にあるものは何か、何のためにやったのかを生徒たちに掴ませることをしっかり見据えて、ゴールラインを決めることが大切ではないかと思う。

竹村校長： 助言があったように一つ一つ準備と記録をして、PDCA を回しながら進めていきたい。委員の皆様には、いろいろなところでご相談をしながら、進めていきたい。

(3) 第2回運営指導委員会（令和5年2月21日実施）

運営指導委員会の記録

第2回 高知市創造的教育方法実践プログラム運営指導委員会

日 時 令和5年2月21日（火） 15時半から17時まで

会 場 高知商業高等学校 校長室

参 加 者 （運営指導委員会委員）

川村会長，市原副会長，森委員，東森委員，岡崎委員
（高知商業高等学校）

竹村校長，成瀬教頭，安岡教頭，掛水主幹教諭，
山本教諭（情報マネジメント科長），川崎教諭（商業），
宮田事務長，朝倉管理主幹管理担当係長事務取扱
（高知市教育委員会学校教育課）

久保指導主事，三嶋指導主事

【報告】

竹村校長： 令和4年度の市商地域創造プログラムということで、校内の組織体制について説明。

まず、この運営指導委員会、カリキュラム開発学習会、管理部門・カリキュラム開発部門と構想を考えていた。しかし、事業自体のスタートが2学期に入ってからとなり、実際の動きは10月になった。カリキュラム開発部門で実際に取り組んだのは、情報マネジメント科のプロジェクトマップの取組であった。管理部門として、私を総括として教頭が推進責任者、事務長が予算の責任者ということで進めてきたが、予算の縛りがあり運用については工夫が必要であった。

創造学実施部門では、総合マネジメント科、社会マネジメント科、情報マネジメント科、スポーツマネジメント科と、4学科で担当教員を決め、それに関わるスタッフという形で、普通教科から教員を募った。若手を中心に組織した。ただし、この会についても2回しか開催することができず、具体的な案を作り、考えるには至っていない。

今後、教科等横断的なカリキュラムを組むために、再度教育課程の見直しと、10月11月に行われる学校行事を一つのゴールに設定し、教科と連働して何が作れるのかを考えていかなければいけない。

今回のプログラムの報告会の中でもあったが、成果として私たちが実感しているのは、各4学科の教員が、自分たちがこれから作り上げていかなければならないということを、私にも教頭にも言うてくれており、指導体制が軌道に乗ってこようかと思っているところである。組織構成については以上である。

山本教諭： 3年情報マネジメント科は、今まで資格検定取得をメインとして取組をしてきた。一方で、情報の学習をしながら実践的な場を踏むことが少なく、なおかつ、3年間クラス替えがなく、人と関わるよりも個人ワークが好きな生徒が多い中で、今回このような場を設け、コーディネーターの東森さんに講師として探究学習に取り組んでいただいた。生徒たちが短期間で、とにかく成功させることを目標に設定しており、東森さんにお話をさせていただきながらまた、川崎教諭にもお手伝いいただきながら取り組んだ。

授業の流れとしては二つである。一つは探究学習、二つ目はプロジェクトマップである。10月に校長から生徒たちに向けてプロジェクトの説明があった。なかなかグループワークが難しい生徒もいたので、東森さんに声掛けしていただきフォローをしながら、何とかグループワークを行ってきた。10月の末には、オンラインで掛川西高校の先生方とZoomを使ってのやりとりをして授業を進めていった。11月には掛川西高校の吉川先生、掛川工業の富永先生、そしてプロジェクトマップにおいて、プロとして活動されているHal Laboの石川さん、この3名に高知に来ていただき、生徒たちに、講義をしていただいた。

グループワークでそれぞれストーリー・テーマを考え、最終的に生徒たち主導で考えることができた。マイクを持って発表する経験がない生徒たちが発表し、

生徒たちがまたリーダーとしてそれぞれの力を発揮してくれて、本当に生徒たちが身に付けた力を実感できた時間でもあった。

いろいろな方面で活躍されているコーディネーターの方から話を聞くと、生徒たちも最後まで成し遂げようと応えていた。モチベーションが上がるような言葉がけなど、本当に勉強させてもらった。

評価に関して、学校評価アンケートで市商マネーマネジメント力に関わる項目があるので、昨年度と本年度で比較をすることを考えている。

また、生徒には取組を通して変化があったと考える市商マネジメント力とその理由について記述式での聞き取りを行おうと考えている。

三嶋指導主事： 管理機関の取り組みについて説明。

管理機関が関わったこととして大方高校の視察及び中核市研修として先生方が悉皆で参加した研修のうち、その研究開発に関わる内容のもの2回についてまとめている。

一つは、ルーブリック評価入門ということで、大阪大学の佐藤先生をお招きして、ルーブリック評価について、1グループ4名で、一つのルーブリック表を作った。それぞれコミュニケーション力であれば、コミュニケーション力はどのような観点で、どのような段階で評価をするか個々の基準を作成する研修を行った。先生方の研修の記録の中から、「高知商業高校の生徒に身に付けさせる力として、この七つの力について、ルーブリック表を作ってみて、評価の観点や、ステップアップの内容を記述しようと思ったときに、なかなか設定がしづらいものもあった」という記述があり、次年度以降、市商マネジメント力を測る指標策定に向けて、今、この市商マネジメント力自体を見直し、学校の教員で話し合い、生徒たちの実態が合っているかどうかというところを、研究する必要がある。

東京学芸大学大学院の小宮山先生お越しいただいて受けた研修では、先生方がたくさんの刺激を受けてくれている。

【意見内容】

川村委員長： 評価について、パフォーマンス評価は、今までの探究の時間では、先生の感覚で成績が付けられていることが多く、子供にとっても納得のいくものではないであろう。大事なのは、先生が一方的に子供たちを評価するというだけではなくて、高校生は特に、自身がこの学習によって、どういう力が付いたのか付かなかったのか、ここが足りない、だから自らこんなふうに学習しようという行動が変わるのが評価。でないという意味がないと思う。評価のシートがあったところで、綺麗にそれが記述されていたところで意味がなく、ここに対してアクセスをすることで、先生からの見た目、本人が考えたこと、これをお互いがこのシートをもとに言語で会話することによって、行動を変えていくものでないといけない。これは先生の方もそうだと思う。子供だけではなく、どういう学習を次に作れば、もっと創造的なクリエイティブな学習になっていくのか、また、深めていけるのかを高校生になったら一緒に作るんだというところに至るための評価であって欲しいと思う。

私は大方高校で、文科省の事業が入って3年間カリキュラム設計を一緒にやる中で、一緒に授業をやると、ルーブリックも一緒に作るということでやっているが、1回でできるわけない。そして、毎年学生は一緒ではないのである。やはり特性も違い、この社会の状況で変わっていくところなので3年間いろいろできなかった学年と、もっと自由にやれている学年はベースが異なる。そういうことも含めて、自分がどの力をこの期間で付けるのだと言う事、友達同士での評価も大事である。

それと併せて、今回は、映像がメインだったと思うが、加えてイベント運営というところがメインだったと思う。それだけではなく、パフォーマンス評価は、各教科の中にもあり、それぞれが単発ではなく、自分を形成するものというように子供が受け取らないとあまり意味ない。分野横断していくことで、子供の中で統合されていかなければならない。そういうことも含めて、どういうパフォーマンス課題に取り組んでいくのかということが、カリキュラムマネジメントとして、年度の最初に整理されていないと、取ってつけたような学習ばかりになってしまって、イベント型の羅列になる。すると、何か楽しかったが、社会に出たらどうも力が身に付いてないということになる。よって、きちんとレポートを書くとか、数字を扱うことが大事である。そのために数学は勉強してないと提案はできない。そして、社会の理解も、今までみたいに覚えてテストに答えるではない。未来を作るために社会科を、国語をどう学ぶか。これも表現力のベースみたいなものである。論理的な思考はものすごく大事である。そういうことも含めて、本人が考えていくということのための評価が大事である。

森 委員： 今回は技術中心であった。新しいことに取り組んで、自分たちの自信に繋がるというところは、やりがいを見つけられない子供たちをここまでやり通せるようにしてきた皆さんの力は素晴らしいと思う。それも次からは、評価も、最初からどういうふうにするのか決まっていて、最終的な目標に向かって、どのように授業を組み立てていくかということをやっているものであり、グランドデザインになってくると思う。それと評価を組み合わせ、新しい年度の事業を考えていく。特に、学校では、マネジメントを大事にされているので、先生方としては、そこをもっと商業のマネジメント、情報マネジメントとはどういうことなのかをもう一度振り返りながら、学校として生徒にどういう力を身に付けさせたいのかということから、評価を考えて行く必要がある。テーマを選んでどういうふうに進めていくのかというグランドデザインが必要である。

生徒の発表の中で、メッセージ、ストーリーや共感が大事であったと言っていたが、そこで何が残ったかが一番大事なポイントであった。それが残っていなかったならば残るように、組み立てを考えていく必要がある。

岡崎委員： 本当に先ほど森さん言われましたけどもコロナ禍の中、それから情報マネジメント科の現3年生は、特性のある子供たちがいる中で、モチベーションをどのように上げていくかが一番大変ではなかったのかと思うが、本当によく最後まで仕上げ、発表まで取り組んだなと感じました。

来年に向けて、課題研究の発表でも感じたが、やはり課題の設定にもう少し時

間をかけていかないといけない。「鍋に穴があいています」「水が漏れています」「だから水を塞ぎます」というこの単純な構図で、高知県を活性化させたいとなったときに、高知県が活性化していかななくてはならないのはなぜか、若者が流出してなぜいけないのかという課題の設定をもう少しレベルを上げていく必要がある。そこに時間をかけていくことが必要である。教員が、なんでと何度も問いかけ、生徒たち同士でも、発問や課題の設定の質を上げていく訓練に時間をもっとかけていくことが必要なのではないかと思う。誰のために、何のためにかというところである。

プロジェクションマッピングも誰のために、何のために、高知の魅力を発信するというのは何のためにかということが子供たちに落とし込んでいくことになるかと振り返りも違ってくる。

2点目は、やはり評価の問題。最初の設定と DO と振り返りが一致しなければならないが、今回は設定と DO と振り返りがそれぞれ別々になっていた。最初の設定とコンセプトと振り返りが一致していない。生徒たちも好きなように、楽しんだらいいと言って、綺麗で良かったというのではなく、そこを商業教育の中で柱にしてきちんとやっていく必要がある。

そして最後に3点目は、やはり発信力ということも心がけていかないと、外部からの評価が子供たちを変えるし、教員の意識を変える。内部で論議して、意識を変えていくのはなかなか難しいが、外部に発信することによる、外部からの力というのは非常に大きいと思う。どのように発信力を持ってやっていくのかということが重要な意味を持っていると思う。これが子供たちを変えるし、学校も変えていくので、重要視されたらどうかと思った。そういった発信もセットにして探究させていく。その結果が県民や市民に与える影響として大きいので、そんなことも来年度、計画してはどうか。

東森委員： 旧来の情報マネジメント科にはなかった IT ツールが生徒や先生に残ったということも今回の取組の大きな成果ではないかと思う。

おそらく次の2年生や1年生は、学年当初からキャンパに触れていくことができるし、プロジェクションマッピングは一つの手段ではあったが、技術面という観点からいくと、次回、これを取り組む際には、スムーズなスタートが切れていくのではないかと思う。

今、私の頭にあることが三つある。一つは来週2月27日に生徒の皆さんと振り返りの会議を持つことである。私自身もここがとても大事な局面だなと考えている。生徒たちが今どういうことを感じていて、この卒業間際に、このことをどのように活かしていきたい、どんな場面で活かそうかと、今この瞬間はどのように考えているのかということ、ぜひ聞いてみたいと思う。それは少なからずとも次の2年生に引き継がれていくものであろうと思う。

2点目は、今回初めて情報マネジメント科の生徒の皆さんとコミュニケーションさせていただいた。これまでは、6年ほど地域実践コースの皆さんとサンプルザとの商品開発で一緒にさせていただく機会があったので、科ごとの特性もあるということを感じながらも、情報マネジメント科の皆さんに、もしかしたら

あるかもしれないなと思った特性は、資格を取るとか、IT 技術を身に付けることを目標としているコースだけに、お題を見つけるということが苦手なのかなと思った。どうしたい、何が問題だと言われたとき、問題が出てれば解けるのだが、問題がなくて問題を見つけてと言われると、ざわざわするという感じがあるのかなと思った。どうしたいかを聞いて、お金はどこから引っ張ってくるというようなことを聞いていくことを次の2年生、1年生でやっていくのが、社会で実践する活躍できる人材に繋がっていくのではないのかというように思う。最初にお題をこちらが用意しすぎるのではなく、あまり与えずに自分たちで考えて決めていけるような、その場づくりが必要だと感じた。

最後に、今回の文科省の新時代に対応した高等学校改革推進事業とは一体誰のための事業なのか。この半年間取り組んで、最も強く感じているのは、もちろん生徒の皆さんに対しては、その1年の教育の場というものを提供していくが、誰が提供するのかというと教員の皆さんであり、この600万円は、教員の皆さんに対する研修費用なのではないか。もしかしたら教員の皆さんが、生徒の皆さんにどのような学びの場を提供していけばよいのかということを考え、変化していかなければいけないのではないか。文科省がそこまで狙っているのかは分からないが、当初この事業に、参画させていただいた時は、生徒たちが変わっていく、生徒たちを変えていかなければというように思っていたが、付き合いをしていくに従って、生徒は、いろいろなことを感じたり考えたりしているだろうと思った。むしろ少し取り残されていくかもしれないのは私たち大人世代。下手すると教員の皆様が、もしかすると少しギャップを生み出しているのかもしれないというふう感じた。このあたりがこの事業の狙いのコアの部分なのかなというふうに感じている。

川村委員長：今回プロジェクトマップングの方は全然中身に関わらせていただいていたが、大学の方で川崎先生に来ていただいて、いろんな連携をさせていただいて、商業高校以外のところでいろいろな小中高校の学習にも、子供さんも先生も、ご支援いただきまして、いろいろやらせていただきました。あとは、高知県の予算でのDXの教育ワークショップであるとか、大学の主催のPBLの勉強会をやってみて分かったのは、高知商業の生徒さんたちはポテンシャルがものすごく高い。コミュニケーション力、基礎的なところも非常に高い。しかし、もったいないのは、今までが資格を取ということでパターン化したものの中で訓練をすることが多かったのではないかと思います。そこで、まず的確に会話をしていくこと。これが学びを深める、探究していくときの基礎であるが、言語を獲得することで盛り上がるのである。感覚でワッとなっていて、常にそのもやもやしたワーとなったものを、的確に相手に伝えて引き出すというところは訓練である。ここが少し弱い。

しかし、2年生がたくさん私のいろんなプロジェクト参加してくれたのだが、その生徒たちは、一緒にやっていると、周りの大人たちから言語を獲得していく。もやもやしたものはこう表現すればいいのかと、会話をし、相手が聞いてくる言葉で、こういうふうな言葉を使ったら引き出せるのかということができてきた

ので、この1月2月に参加してくれた生徒たちは、ワークショップをやったとき、生徒たちばかりのチームができた。大丈夫かなと思ったが、大人に負けないぐらい、課題をどう解決していくかを自分たちで考えて取り組んでいた。ただ今度は、その先があって、これはさっき岡崎委員もおっしゃられていたことで、イノベーションかということである。ここが今からの社会、ものすごく大事なことで、0から1ではなく、今までにあることであるが、見方を変えたり、価値提供するなど、物を作る時も売るときもそうである。新たな価値提供や、自分だからこそできるというものをきちんといろいろな人達と出し合っただけで形にするという時間。ここが、単に生徒だけに任せたらできないのである。社会人もそうである。やはりそういうことに知見がある人や、取り組んでいる人たちが一緒に組み合わせることでハッとさせる。そして作っていく。この体験ができてないのではないかと思う。しかし、やれば、この生徒達はものすごく早くやれる力を持っているので、ぜひ来年、そういうことを組み込んでいくことをやっていただければ、全然違ってくる。

竹村校長： 今おっしゃっていただいた、表現力や表に出す力が少し足りていない。インプットが足りないのではないかということは、学期の総括の中でも出ている。また、このプロジェクトもそうであるが、もっと外へ出したいという思いもあり、いろいろなプロの方であったり、今回、東森さんと関わらせていただいて、すごく生徒たちが変容したと思う。また、技術指導に来てくれた方々に生徒たちが本当によく歩み寄っていった。そこから得られるものがたくさんあったなということに改めて感じた。それを次のプログラムに落とし込んでいかななくてはならないところが次年度の課題であろう。

次年度の取組については、統一テーマとして、地域を創造する市商を打ち出すに当たり、それぞれの学科の特徴を活かしながらやっていこうと担当者と話しているところである。総合マネジメント科においてはアントレプレナーシップ高知県の未来を創造する。社会マネジメント科は世界と繋がる地方創生に貢献できる人材になる。情報マネジメント科は情報を活用して高知に貢献できる人材、今回の事業の継続。スポーツマネジメント科は、スポーツで健康な地域づくりということで、テーマを設定して進んでいこうと考えている。そしてこのテーマに基づいて、課題研究、これが3年生での設定になるので、当然のことながら、前年のような10月からのスタートではなく4月からのスタートというところで、計画を練り直したい。

一連のこの取組を通して市商創造学というものを、3年度目に確立をしたいと考えている。先ほどご指導いただいた言語といったことも、もう1度全員で話をしていきたい。次年度に対してのご意見も先ほどご示唆いただいたので、それを盛り込んで話をしていく。

岡崎委員： 課題の設定を高めていくというために、教員が勉強しなくてはならないと思う。生徒が出してきたテーマで、そうか、そのようなこと考えられたらすごいねということだけではいけないと思う。

そこについては、やはり質を高めていくために厳しいコーチングが必要であ

り、なんで?というようなところを突っ込まなければならない。それが生徒たちでできるようになる課題づくりをしていく。その時に注目してもらいたいのは、抽象的表現である。地域を元気にするなど、それで生徒たちは満足している。元気にするや、楽しいなど、その本質的な意味は何なのかというようなことを問いかけていく、そのような課題を作らせていく。或いは逆説的なことも考えさせていく。高知がなぜ人口が減ってはいけないのかというぐらいの課題設定の仕方の研究を、先生方としてもらいたいと思う。日常の授業課題。その設定の仕方がまだまだ甘いのではないかと思われる。

二つ目は事務局への提案である。私達委員の構成の中でマスコミの関係の人など、発信力を持って客観的に厳しい目を持っている人にも入っていただいて、同時にそういった人にも実態を見てもらって、発信にも協力してもらおう形で、違う視点を持っている方々にも入っていただいたらどうかと思う。それも発信力に繋がっていくし、質問もよくしてくれるのではないか。委員長と相談して、委員の選定について考えていただいたらと思う

森 委員： 問題と課題が混在していて、何に取り組むのかってということが明確になっておらず、先生方が指導してあげないと、生徒たちが全然違う方向にいつてしまう。高校生らしい課題解決を考えましたと言っているけれども、全然高校生らしくなく、普通に本とか新聞に書いているようなことを発表されているというのが事実だったのではないかと思う。やはり、その捉え方を先生方も、いろいろな情報、新しい情報を、新聞や雑誌から集めて、先生も生徒たちと一緒に、情報を用いながらどういうところに問題があるのか、もし解決するとしたらどうなのかと考えながら取り組んでいく必要がある。高知商業で取り組んでいることが、課題解決でおそらく止まってしまっている。私たち川村先生と取り組んでいるのは、その先の未来を考えて、どういう価値を見出していくのかという課題解決の先を考えて10年後を考える20年後を考えるという取組をしている。おそらく高知商業高校の生徒さんはすごく、個人個人の能力は高いので、引き上げをして、単なる課題解決に終わらず、その先へ進むというカリキュラムをぜひ考えていただいたらいいかなというふうに思う。

川村委員長： 4つの科に分かれているということですがけれども、やはりそのデジタルというところが、すべての基礎になり、大学改革がものすごく急がれており、文系理系関係なく、データサイエンス、数理について、すべての学生がやらないといけないということで今急がれているが、大学進学する子供たちはそういう変化に関係してくると思うが、そうではない子供たちが、社会に出たときにものすごく苦勞する。企業からの依頼もほぼそのDX関係であり、何とかしたいというご依頼がすごく多い。それと一歩進んでいる企業でいくと、同じ20代でも大学卒業して入ってくる人たちの方が、デジタルサイエンスのレベルが高くて、20代後半でも使えなくなってきたと。これは一大事だというような話も出てきている。高知を見ると非常に遅れている。ICTと言っているのですがどうしてもそっちへ行っているが、ICTも古くて、もうインフォメーションではなく、ベースはデータである。AIがものすごい勢いで発展し、少し前まではAIは、技術がある人ではない

と使えなかった。しかし、今はデータをたくさん勉強した AI がサービスされてきて、普通の人が使いやすくなってきてどんどん使用する中で、スーパーマーケットなど、本当に入ってきていると思う。工業も。行政も。先ほどから話題に出ている課題を設定する力とデータがものすごく関連してくる。両方が分かっていると仕事ができない。チャット GPT もものすごく話題になっているが、私も子供と一緒にやって遊んだりする。ものすごいレベルで文章を作っていく。若い人に同じことを同じ時間でやってもらったら、若い先生よりもチャット GPTの方が上手に文章を作った。東大生でもそうであつたらしい。しかし、怖いのは、関数を教えてといえ、関数の式も出してくるし、ちょっとしたプログラムも組めるので、プログラミングはすでに AI でできる。したがって、プログラマーを育てても、今の高校生たちはもう仕事がない。それならばもっと上位をいく。上位とは、どんなデータを、何のために使うのかという本質は変わらない。何のためにやるのか、何の課題をやることでどんな価値を生み出すのか。それが自分のことだけではなくて、できればその社会、身の回りや社会を変える課題を解決しながらみんなが豊かに暮らしていく、そういうことは繰り返し小さいうちから考えてないといけないと当たりをつける力は生まれてこない。やはり誰かが言ってくれるまで待つようになる。これは、情報マネジメント科だけではなく、すべての科の中で ICT の先を実践されて他の学校が参考にしていけるように、ぜひお願いできればと思う。もう少しすると多分 VR の中で仕事をしていくようになっていく。世界は、そこまで来ている。今すでにその分野の中で活躍している人たちの討論会に参加した。こんにちとは言って、そこで新しいものを作ったり、ビジネスを始めたりということが起きている。もちろんいいことばかりではない。最悪のこともある、いろいろ人間関係が難しいこともあるけれども、ひょっとすると今の子供たちの時代は、見た目の問題ではないところで活躍するという世界も出てくるのではないかというようなことを考える。私たちの感覚では少し理解できないけれども、そこに一つの経済ができることは間違いない。ここへ行ったらものすごく活躍できる、世の中引っ張っていけるっていうことも出てくるので、何かそんなこと許せる大人側であらなければいけないのかと思った。

岡崎委員： 教育研究所の不登校児が学ぶ中で、総合学習において、プレゼン大会をやろうと、タブレットを渡して、タブレットを介在するとできた。そこに媒体が入ってくることによって、対話をしながら行うことができた。これからすごく変わってくると思う。

竹村校長： 本当に貴重なご意見をいただきました。やはりこれだけ早く世の中が変化をしており、当然私たちが育てる子供たちはその社会に出て行かなくてはならない。そこで求められているものは何かということが、時代に先んじて考えられていないと改めて感じた。先ほどの言語等については、本当に弱いという認識を持っている。ぜひ、それを全員で考えて、新たなプログラムに落とし込んでいきたい。

2 コーディネーターの取組について

(I) コーディネーターの配置

① 高知市立高等学校コーディネーターの就業等に関する要綱の制定

文部科学省の参考資料の「コーディネーター業務の概要(2)」には、「コーディネーターが非常勤やボランティア等といった配置では、必要なコーディネート機能を継続的に担うことができず、教職員が多くの役割を担う必要がある」と示されていたことから、コーディネーターの雇用形態はパートタイム会計年度任用職員とすることとした。

高知市立高等学校が取り組む新時代に対応した高等学校改革推進事業（創造的教育方法実践プログラム）の推進のために配置するコーディネーターの就業等に関し、高知市会計年度任用職員の給与及び費用弁償に関する条例、高知市会計年度任用職員の任用等に関する規則及び高知市会計年度任用職員の勤務時間、休日及び休暇に関する規則に定めるもののほか必要な事項を定めるため、「高知市立高等学校コーディネーターの就業等に関する要綱」を制定し、高知市立高等学校コーディネーターの就業等に関する要綱第2条に基づき、コーディネーターを採用した。

② コーディネーターの任命

高知市立高等学校コーディネーターの就業等に関する要綱に基づき、コーディネーターの任命を行った。コーディネーターの期間については、令和4年9月1日から令和5年3月31日までとし、文部科学省との契約日（令和4年8月12日）以降で準備し、2学期の開始に合わせて任命を行った。

③ コーディネーターが取り組む内容

高知市立高等学校に配置する高知市立高等学校コーディネーターの就業に関し、高知市立高等学校コーディネーターの就業等に関する要綱に定めるもののほか必要な事項を「高知市立高等学校コーディネーター就業要項」に定め、コーディネーターの職務内容については、第2条に示した。下はその要項の一部である。

高知市立高等学校コーディネーター就業要項

(目的)

第1条 この要項は、高知市立高等学校に配置する高知市立高等学校コーディネーター（以下「コーディネーター」という。）の就業に関し、高知市立高等学校コーディネーターの就業等に関する要綱に定めるもののほか必要な事項を定めるものとする。

(職務)

第2条 コーディネーターは次の各号に掲げる職務を行うものとする。

- (1) 地域社会と関わる教育課程の企画・運営・支援
- (2) 地域側との連絡調整・情報提供
- (3) 学校への地域資源の活用
- (4) 組織体制の構築・運営（ビジョン・計画づくり、事業・会議の運営等）
- (5) その他高知市立高等学校長（以下、「学校長」という。）が必要と認める業務

(2) 高知市立高等学校コーディネーターの活動

① コーディネーター活動日程及び活動時間

	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
打合せ	6回	3回	6回		1回			16回
授業資料作成		4回	3回	1回	2回	1回		11回
課題研究講座		5回	6回	2回	6回	4回		23回
運営指導委員会		1回				1回		2回
研修			2回				2回	4回
合計活動回数	6回	13回	17回	3回	9回	6回	2回	56回
月間活動時間	480分	1110分	2410分	370分	1030分	880分	390分	6670分

※ 3月の月間活動時間は見込

② コーディネーター活動報告書より（所感一部抜粋）

○ 令和4年11月25日（金）

第2回コーディネーター研修（オンライン）

テーマ「ロジックモデルの再構築とプロジェクトの進め方」

- ・ 他校の事例を聞きながら気付いたのは「なぜ高知城で映像投影をするのか？」を明確にしてテーマや映像の中に盛り込んで、視聴者に伝えることが重要であること。
- ・ 高知城歴史博物館のスタッフを講師に迎えて、高知城のことについて深く理解する必要があるのではないか。
- ・ ロジックモデルを真ん中において講座（授業）の進め方や内容を構築すること。ロジックモデルに照らし合わせると現在不足していることは「生徒自身の深い学び」「外部機関や海外との連携・交流」「高知（地元）を意識したり、高知に対する影響について生徒自身が気づいてテーマなどに設定すること」である。

○ 令和4年11月30日（水）

第3回コーディネーター研修（オンライン）

テーマ「コーディネーターと高校教員の役割分担と協働体制を作る方法」

- ・ 学校の中のルールや定義と社会の進み具合の中に乖離（ギャップ）がある。例えばマスコミへの情報発信やSNSの利用など。
- ・ コーディネーターの果たす役割や効果としては、外部の視点からの言動により、学校内活動の意義や影響を再認識できることがある。
- ・ コーディネーターとしてこの事業にどう関わり参加するのかを再認識する。教員と生徒の真ん中に入る立場として、両者の特徴やメリット・成果を引き出せるように意識して講座を企画・進行すること。地域の資源と学校（生徒と教員）をつなぐ役割を果たすこと。今回の例では掛川からの専門知識が挙げ

る。他には高知県内の資源と学校をつなぐことも達成したい。

- ・ この授業を通じて目指す目標や成果，そもそもこの授業を行う目的に基づいてこまめな情報交換や進行確認の打ち合わせの場を設けることが重要であることを認識した。

○ 令和5年2月12日（日）

高知城追手門プロジェクションマッピング実施

[全体所感]

準備から片付けまで問題なくスムーズな進行ができた。本番の進行は生徒にとっても緊張感のある現場となっている様子で，それぞれが役割を務める姿を確認できた。また，その持ち場で発生する小さな問題や判断が求められることもお互いに相談・確認しながら，必要に応じて教職員にも相談しながら進行できた。生徒たちの状況判断力や実践力が問われ，そして自分たちなりに能力が発揮できた現場となった。この経験は卒業後の進路の中できっと役立つ場面がやってくるはずである。また，クラスの中の仲間同士の連携や絆が深まり，高知商業高校情報マネジメント科に在籍して実績を残す実感を強く得られる経験になった。教職員や私のようなコーディネーターも生徒の姿を通じて今後に活かす情報と経験をたくさん得ることができた。

3 高知県立大方高校「地域との協働による高等学校改革推進事業」視察

大方高等学校は、文部科学省指定事業「地域との協働による高等学校改革推進事業」【地域魅力化型】の取組3年目後半の時期でもあり、運営指導委員会の川村晶子委員長（高知大学次世代地域創造センター）がカリキュラム開発専門家としてかかわっておられたことから、高知商業高等学校にも案内をいただき、高知県立大方高等学校体育館でのPBL授業の様子を視察した。

- (1) 訪問日 令和4年10月6日（木）10：00～16：00
- (2) 訪問者 竹村校長，岡崎委員，三嶋指導主事
- (3) 参加者 高知商業高等学校情報マネジメント科2年生13名，1年生4名
- (4) 引率者 山本教諭，川崎教諭，小谷実習助手

会場は体育館全体に、島机が設置され20グループに分かれていた。各グループ7～8名程度の構成メンバーは、大人（黒潮町行政職員・地域住民・中学校教諭や民間企業の方など）が2～3名、生徒（大方高等学校と高知商業高等学校あわせて）5名程度であった。

当日の講師陣とKeyスピーカーは次のとおりであった。

- 川村 晶子 氏（高知大学次世代地域創造センター）
- 森 和美 氏（高知大学次世代地域創造センター）
- 拝野 晃希 氏（富士通ラーニングメディア）
- 別役 聡子 氏（株オリィ研究所）
- 斎藤 香織 氏（防災植物協会事務局長）
- 渡辺栄美子 氏（株ひととコーポレーション）

高知商業高校の生徒は、大方高等学校の生徒と同様に、講師陣のKeyスピーチをもとに、アウトプットの「黒潮町を守るスマホアプリを考える」グループワークに参加した。発表に向けたワークショップでは、学年を越えて大方高等学校の生徒と一緒に意見を出し合い、まとめていく過程を体験した。アイデアワーク①では、対象をしっかりと分析するとともに、課題を定義し、アイデアワーク②では、発想を拓げる段階を経て、最後はアイデアを模造紙1枚に視覚的に示すため、アプリ開発に至った経緯や目的、言葉の選び方、イラスト等のレイアウト、このアプリで黒潮町の誰をどのように守ろうと考えたのかなど、短時間でまとめた。

思案する場面では、めいめいがハサミを使ったり、イラストを描いたりと手を動かす活動が設定されており、グループにいる世代や経験の違う大人のメンバーからの問いかけでは固くなりがちな思考を柔らかくほぐす言葉かけがあり、新しい発想を引き出すには、リラックスした場づくりを意図して行っていることが感じられた。

アイデア発表は、松本敏郎黒潮町長や畦地和也教育長をはじめ、審査員の審査により、ベスト5が選ばれた。最後に石塚悟史高知大学次世代地域創造センター長が総評として、新しいアイデアを形にしていくことの価値について語られた。

4 研究開発に係る高等学校教職員研修の実施について

今年度の研修の記録の集計結果は次のとおりである。

	研修名		必要な知識・情報				教育実践への活用				活用度			
			4	3	2	1	4	3	2	1	3	2	1	
1	全日制Ⅰ	6/1	38	16	3	0	38	16	3	0	39	11	10	リスクマネジメント 阪根健二特命教授
2	全日制Ⅱ	7/6	34	24	0	0	35	23	0	0	41	11	8	子どもを理解するために 吉岡孝敏臨床心理士
3	全日制Ⅲ	10/19	35	24	1	0	34	25	1	0	25	21	15	ルーブリック評価入門 佐藤浩章准教授
4	全日制Ⅳ	12/5	38	22	0	0	36	24	0	0				A時代の社会 人材、学校教育の役割 小宮山利恵子准教授
合計（人）			145	86	4	0	143	88	4	0	105	43	33	
パーセンテージ（%）			61.7%	36.6%	1.7%	0.0%	60.9%	37.4%	1.7%	0.0%	58.0%	23.8%	18.2%	
平均			3.6				3.6				2.4			

* 活用度は、原則次回研修の際に、アンケートしている。

研修の記録には、研修に係るアンケート項目として、「(1) 必要な知識・情報を得ることができましたか」、「(2) 今後の教育実践に活用しようと思いましたが」の2つを設け、4段階（4 そう思う・3 ややそう思う・2 あまりそう思わない・1 そう思わない）で回答するようにしている。また、「前回の研修内容を、研修受講後の業務等の中での程度活用しましたか」という項目について、3段階（3 活用した・2 活用を予定している・1 活用は未定）で回答するとともに、その理由を記述する欄を設けている。

<table border="1"> <tr><td>検印欄</td></tr> <tr><td>教育研究所</td></tr> <tr><td>所属長</td></tr> </table>	検印欄	教育研究所	所属長	令和4年6月1日（水）実施
検印欄				
教育研究所				
所属長				
令和4年度 高等学校教職員研修 全日制Ⅰ・定時制Ⅰ「研修の記録」 受講者No. () 氏名 ()				
【講義・演習】 「生徒指導のリスクマネジメント」 講師：鳴門教育大学大学院 学校教育研究科 阪根 健二 特命教授				
1 本研修に係る次の項目について、あてはまる番号を○で囲んでください。				
(1) 必要な知識・情報を得ることができましたか。	そう思う ややそう思う あまりそう思わない そう思わない 4 3 2 1			
(2) 今後の教育実践に活用しようと思いましたが。	4 3 2 1			
2 本研修を通して、①「講義から理解したこと」、②「他の先生方から得たこと」、③「ご自身の課題を踏まえ、研修で学んだことをどのような場面で活用したいか」等、具体的に記入してください。				
.....				

(I) ルーブリック評価入門（10月19日実施）

全日制Ⅲでは、佐藤 浩章 准教授（大阪大学）を招聘し、「ルーブリック評価入門」と題し、市商マネジメント力を測るためのルーブリックの作成にあたり講義・演習を行った。佐藤先生には、昨年度も「高校教員のための探究学習入門」と題して、オンラインで講義・演習を行っていただき、本校の取組を把握したうえで、全ての教科科目で探究的な問いを立てて授業を行うための基礎をご指導いただいた。

昨年度の研修内容をまとめた研修便り及び研修実施報告書は、「VI 補足資料」に掲載する。今回各班で協議し作成を試みたルーブリック評価表は次のとおりである。

① コミュニケーション力について（4名1組×2班）

市商マネジメントカ 1 コミュニケーション力

観点	step4 優秀な3年生程度をイメージ	step3 一般的な3年生程度をイメージ	step2 2年生程度をイメージ	step1 1年生程度をイメージ	得点
多様性の受容	自分と異なる意見や価値観について、自身の考えとの対比や融合を試みることができる。	自分と異なる意見や価値観を新しい情報として受けとめることができる。自身の考えとの対比や融合を試みる努力はできる。	自分と異なる意見や価値観を新しい情報として受け止める意欲がある。自身の考えとの対比や融合を試みる努力はできる。	自分と異なる意見や価値観を新しい情報として受け止める意欲はある。	
共感の提示	他者の考え方や感情などを受け止め、理解することができる。また、理解していることに対する共感的な反応、他者の考え方や感情などを引き出す質問ができる。	他者の考え方や感情などを受け止め、理解することができる。また、理解していることを、共感的な反応によって示すことができる。	他者が伝える考え方や感情などをそのまま受け止めることができる。	他者の話を最後まで聞くことができる。	
正しい理解	他者が伝える内容について、その背景や意図を踏まえた上で理解することができる。細部まで情報を理解している。	他者が伝える内容について、表面的な理解は出来ている。情報の送り手については十分に理解できていない。細部の情報について、誤解なく理解することが必要である。	他者が伝える内容を正しく理解することが必要である。	他者が伝える内容を理解することが必要である。	
明確な伝達	他者の視点を考慮した上で、伝えたい話の筋が整理されている。情報の受け手が理解できる表現を使用している。	他者の視点を考慮して伝えようとする。話の筋・要点的整理ができていない。	他者の視点を考えずに伝えていく。話の筋・要点的整理が十分にできていない。	自分の考えや気持ちを示していくことが必要である。	
配慮のある自己主張	相手の考え方や気持ちや状況への配慮を踏まえた上で自分の考えや気持ちを伝えることができる。	自分の考えや気持ちを率直に伝えることができる。相手の考えや気持ちや状況への配慮が不十分である。	自分の考えや気持ちを率直に伝えることができる。相手の考えや気持ちや状況のみを伝える。	他者への配慮が必要である。	

市商マネジメントカ 1 コミュニケーション力

観点	step4 優秀な3年生程度をイメージ	step3 一般的な3年生程度をイメージ	step2 2年生程度をイメージ	step1 1年生程度をイメージ	得点
伝える力	自分の伝えたい想いを正確に伝えることができ、それによって相手の言動を変えることができる。	自分の伝えたい内容をわかりやすく伝えることができる。	自分の伝えたい想いを表現することができる。	自分の伝えたい想いを表現することが十分にできない。	
聴く力	相手の発する言葉の意味を考え、その言葉の意味を相手に確かめながら聴くことができる。	相手の発する言葉の意味を考えながら聴くことができる。	相手の話をうなづきながら聴くことができる。	相手の目を見て穏やかに聴くことができる。	
深める力	対話の中で、自他の考えが深まったことに気づくことができ、それを相手と共有することができる。	相手の言葉を聴いて、適切に質問を行い、対話を発展させることができる。	相手の発言に対して、肯定的or批判的な感想や想いを伝えることができる。	相手の発言に対して、肯定的な感想や想いを伝えることができる。	
まとめる力	相手の立場を考えて、共感して寄り添うことができる。	相手の考えを客観的(感情的ではなく)に理解することができる。	最後まで相手の話を聞いた上で、自分の考えを発言することができる。	最後まで相手の話を聴くことができる。	

【成果】

- まずは取り入れるメリットについて再確認できた。それは3つあり、評価しにくい高度で複合的な能力を評価することができる点がまず1つである。また、ルーブリックに明示しておくことで、考えるべきことの手がかりを示すことになるため、生徒たちの学習を促す効果や、批判的思考力等を伸ばすことが期待できる点が2つ目である。さらに、授業改善の絶好の機会となることは、実習を通して体感できた。教員それぞれに評価基準が曖昧であったり、ずれてしまう部分をモデレーションを繰り返すことで取り除くことができれば、学校全体の教育力向上にもつながると感じた。

【課題】

- △ 今までの基準のない評価方法を考えると、大切なものと感じました。しかし「枠にはめる」ような感覚は拭いきれない。そのためには評価する我々の力量を上げる他にない。

② 課題発見・課題解決力について（4名1組×2班）

市商マネジメント力 2 課題発見・課題解決力

観点	step4 優秀な3年生程度をイメージ	step3 一般的な3年生程度をイメージ	step2 2年生程度をイメージ	step1 1年生程度をイメージ	得点
情報収集力	客観的な資料を複数収集し、説得力のある状況判断につなげようとしている。	複数の情報を収集、整理し、多面的な分析につなげようとしている。	ネット情報や新聞、文献など複数の情報を収集し整理できている。	ネット情報を活用するなど、最低限の情報を収集できている。	
状況判断	課題に対して、それを取り巻く状況や要因を的確に把握して、今後の方向性を立てることができる		課題に対して		
発案力	課題に対して、複数の情報をもとに分析・状況判断し、他者や社会と繋がりながらこれまでにない解決策を合理的に出すことができる。	課題に対して、複数の情報をもとに分析・状況判断し、合理的に解決策を出すことができる。	課題に対して、情報をもとに他者と協力して解決策を出すことができる。	課題に対して、自分なりの解決策を出すことができる。	
行動力	自主的に解決に向けて実行可能な計画を立て外部への報告を実施することができる	解決に向けて他者と協力して計画を立て外部への報告を実施することができる	解決に向けて他者と協力計画を立てることができる	指示されたことはできる	

市商マネジメント力 2 課題発見・課題解決力

観点	step4 優秀な3年生程度をイメージ	step3 一般的な3年生程度をイメージ	step2 2年生程度をイメージ	step1 1年生程度をイメージ	得点
調査・分析	専門書等を熟読した上で地域・企業などに訪問し、情報を得て自分の物にしている。	地域・企業などに訪問する。	インターネット等で調べる。	言われたことができる。	
仮説設定	現状と目標を把握し、その間にあるギャップの中から解決すべき課題を見つけ出し、優先順位付けができている。	現状と目標を把握し、その間にあるギャップの中から解決すべき課題を見つけ出し出している。	現状と目標を把握し、その間にあるギャップの中に問題を見つけている。	与えられた課題を正しく理解できている。	
計画	目的と目標を設定し、複数の方法から最善の方法を選択し、5W1Hを用いた計画を立てている	目的と目標を設定し、複数計画を立てている。	目的と目標を設定し、計画を立てている	目的と目標どちらか一方を立てることができる。	
実践	課題解決ができるまで修正・応用を加えながら継続して実践することができる。	課題解決ができるまで継続して実践することができる。	課題解決に向かって継続して実践することができる。	課題解決に向かって実践することができる。	
振り返り	学びのプロセス(体験学習・課題の作成など)で、自分がどのような方法をとったのか順序立てて記述することができおり、自身の活動についての意義を具体的に振り返ることができている。	学びのプロセス(体験学習・課題の作成など)で、自分がどのような方法をとったのか順序立てて記述できる。	学びのプロセス(体験学習・課題の作成など)で、自分がどのような方法をとったのかについて断片的に記述できる。	学びのプロセス(体験学習・課題の作成など)で、自分がどのような方法をとったのかについて記述できていない。	

【成果】

- 生徒の諸活動に対して評価を求めている教員自身が、客観的また統一的な視点を持って明確な評価方法を持つておく必要がある。また、私自身クリティカルシンキング(批判的思考力)の視点を組み込んだ到達目標の設定を实践してたが、その到達度を測る方法を模索している中でルーブリックを活用した評価を繰り返していくことが生徒の批判的思考力を伸ばしていくことにつながっていくということを知ることができた。

【課題】

- △ 市商マネジメント力における概ね満足とされる評価基準がどの段階なのか、また、それぞれをどういった観点で見取るのか、考えさせられる研修であった。加えて、市商マネジメント力とは日頃から言うものの、いかに曖昧な基準によって作られた到達段階であるのかを認識した。

③ プレゼンテーション力について（4名1組×2班）

市商マネジメントカ 3 プレゼンテーションカ

観点	step4 優秀な3年生程度をイメージ	step3 一般的な3年生程度をイメージ	step2 2年生程度をイメージ	step1 1年生程度をイメージ	得点
発表構成	プレゼンテーション全体を通して、論理的に構成されており、筋道のたっただわたりやすい構成である。内容もストーリーとして伝わる	プレゼンテーション全体を通して、論理的に構成されており、概ね筋道のたっただわたりやすい構成である。	概ね筋道のたっただわたりやすい構成である	プレゼンテーション全体を通して、話す順序に一貫性が見られない	20
発表技術	ジェスチャー・アイコンタクトなどが効果的に使用されており、声の大きさ・スピードも十分聞き取りやすい	声の大きさ・スピードが十分聞き取りやすい	声の大きさ・スピードは概ね聞き取れるが、創意工夫に欠ける	ジェスチャー・アイコンタクトはなく、声も聞き取れない。	20
発表内容	主張や論点がテーマに沿って明確であり、事実・事例が詳細かつ正確である。	事実・事例が詳細かつ正確である。	事実・事例に誤りや抜けがある	事実・事例がない。または不正確である	20
発表資料	PowerPoint・タブレットなどを用いて配布資料を適切に使い分け、非常にわかり易く、工夫が見られる	配布資料はわかりやすいが、図が足りない・文字数が多い	資料が適切でなく、誤字脱字も多い	資料が未配布。または、プレゼン内容に役立てられていない	20
発表時間・情報量	指定された制限時間内に収められており、情報量はテーマに即して適当であり、必要十分である	制限時間内に収められており、情報量も適当である	発表時間内に収められているが、情報量に過不足が見られる	発表時間に大幅なあまりが見られたり、超過しすぎることもあり、情報量にも過不足がみられる	20

市商マネジメントカ 3 プレゼンテーションカ

観点	step4 優秀な3年生程度をイメージ	step3 一般的な3年生程度をイメージ	step2 2年生程度をイメージ	step1 1年生程度をイメージ	得点
構成力	序論・本論・結論が完璧にできている	論理的に述べられている	プレゼンの構成の構造に沿って、述べられている	結論は述べた	
発表態度・発声	ジェスチャーやアイコンタクト、抑揚をつけている。聴衆とのやりとりができる。	聞き手を巻き込むことができる	立ち位置に気を配りながら台本を見ないで発表できる	大きい声で前を向いて発表した	
発表内容	複数の情報源をもとに事実や聞き手に興味を持ってもらう、説得力のある情報を提示できる	正しい事実や経験に基づいている情報を提示できる	テーマに沿っている内容である	情報源が曖昧だった	
時間	ピッタリ	±30秒以内	±1分以内	1分以上オーバー	
資料	非常に効果的な資料が適切な場面で使われていた	1ヶ所資料が抜けていたが、資料を効果的に活用できている	2ヶ所以上資料が抜けているが、資料を活用して説明ができている	適切に資料を活用できなかった	

【成果】

- 今回の研修での一番の成果は、パフォーマンス評価の必要性を教員間で共有し、ループリック表の作成という具体的手段までたどり着いたことである。今までは各教科、または担当者がループリック評価を用いた授業を行ってきた。しかし今回は「市商マネジメント力」について共通のループリック表を作成することができた。その過程において、教科を超えた共通認識を図ることができた。

【課題】

- △ 実際にループリックを使い、レポートの評価を体験し、評価に悩んだところは、ループリックの改善の余地があるということを感じた。このことにより、実際に現在、使用しているループリックで、評価に悩むところは、改善の必要性があるということを感じた。今後も、評価の観点を、生徒たちと共有することにより、授業の構成に反映させていくことを継続し、改善をしていく。

④ 講義理解力について（4名1組×2班）

市商マネジメントカ 4 講義理解力

観点	step4 優秀な3年生程度をイメージ	step3 一般的な3年生程度をイメージ	step2 2年生程度をイメージ	step1 1年生程度をイメージ	得点
インプット メモ力(聴く力)	①項目ごとに分類できる ②色を使ってメモが取れる ③各要素のつながりが書けている ④既存の知識と結びつけている ⑤聞いたこと以外も書けている	①～⑤のうち3つ以上できている	①～⑤のうち2つ以上できている	①～⑤のうち1つ以上できている	
アウトプット 要約する力	論点が明確になっている 講義中に使用した言葉を使っている	論点は明確だが、講義中の言葉が使用できていない	論点がずれているが、講義中の言葉を使用できている	論点もずれており、講義中の言葉も使用できていない。	
説明する力	①問いに対して的確なキーワードを使って説明できる ②関連した質問をすることができる ③他者に講義の内容が説明できる	①～③のうち2つ以上できている	①～③のうち1つ以上できている	少しつたない部分があるが、説明できている。	
活用する力	社会の中で活用できている。	進路学習につなげることができる。	自分の意見を述べるできている。	活用できていない。	

市商マネジメントカ 4 講義理解力

観点	step4 優秀な3年生程度をイメージ	step3 一般的な3年生程度をイメージ	step2 2年生程度をイメージ	step1 1年生程度をイメージ	得点
講義を聞く力	講義の100%を集中して話を聞くことができる。	講義の80%を集中して話を聞くことができる。	講義の70%を集中して話を聞くことができる。	講義50%を集中して話を聞くことができる。	
メモする力	講義された内容を全て正確にメモすることができる。	講義された内容の85%程度をメモすることができる。	講義された内容の70%程度をメモすることができる。	講義された内容の60%程度をメモすることができる。	
講義を理解する	一般論(参考文献)を提示しながら自分の意見を伝えることができる。	自分の意見を内容を説明しながら伝えることができる。	内容について調べることができる。	メモをとりながら聞くことができる。	
講義を正確にアウトプットする(話す)	講義内容を要約できるとともに、プレゼンテーション資料にまとめ人前で発表できる。	講義内容を重要語句を使って人に説明できるとともに、具体的な事例を踏まえて説明できる	講義内容を重要語句を使って説明できる	講義内容を説明できる	
講義から自身の考えを述べる	講義を受けて、社会問題や課題に対して、具体的な解決策を述べるができる。	講義を受けて、賛否を述べ、その根拠を述べるができる	講義を受けて、自身の考えを述べるができる	講義を受けて感想を書くことができる	
講義内容を正確にアウトプットする(書く)	講義内容を要約し、分かりやすい表現で文章化できる。	講義内容を重要語句と具体的な事例を踏まえて文章化することができる。	講義内容を重要語句を使って、文章化できる。	講義内容を文章化できる	

【成果】

- 学力とは何か、学力の測定方法を確認できた。見える学力を測るペーパー試験、パフォーマンスを測るルーブリック、その使いわけ、活用するバランスを理解できた。これからは大学入試でも高校での探究学習のウエイトが強まる。今、力を正確に測り、生徒にフィードバックすることが必要になる。

【課題】

- △ 生徒の成長にあわせた質の高いルーブリックを作成していく必要がある。
- △ 複数の教員で精選された評価基準を作成することが必要である。講義理解力型のルーブリック評価は、授業の中でも活用をしていたが、今回の研修を受けて、さらにブラッシュアップを図りたいと感じた。

⑤ ICT活用力について（4名1組×2班）

市商マネジメントカ 5 ICT活用力

観点	step4 優秀な3年生程度をイメージ	step3 一般的な3年生程度をイメージ	step2 2年生程度をイメージ	step1 1年生程度をイメージ	得点
ログインのスムーズさ	IDとパスワード両方を暗記している	IDとパスワード両方をメモしている	IDとパスワードのどちらかが分からなくなっている。	IDもパスワードも分からなくなった。またはアカウントがある事を忘れている。	
アプリ立ち上げのスムーズさ	目的のアプリがどこにあるか知っており、立ち上げることができる。	目的のアプリがある場所は見つからないが、検索で見つけて立ち上げることができる。	目的のアプリがある事は知っているが見つけれない。または見つけてもダブルクリックが出来ない。	アプリの存在を知らない。	
タブレットの所持	最新状態で満充電に近い状態のタブレットを所持している。	タブレットを持っているがバッテリーが少ない。またはアップデートを一切していない。	タブレットを持っているが、画面が割れていてほとんど見えない。	タブレットが充電されていない。またはどこにあるか分からなくなっている。	
周辺機器の充実	自前の周辺機器を持っており、自在に使用できる。またはドックに沢山の機器が挿さっていることを自慢できる。	自前の周辺機器を持っていないが、貸し出し機器を使うことができる。	接続したい意思があるが自力で接続出来ない。または端子の異なる機器を買ってしまっている。	何かを接続するという認識がない。出来ると思わない。	
調べる力	適切なサイトを複数確認した上で確かな情報を得ることが出来る。	ネット検索は出来るが、情報の信頼性までは確認できない。	ネット検索ではなく、Twitterなどの噂レベルの情報を信じてしまう	「ググる」と言われても意味が分からない。または忙しい人にも平気で質問する。	
アプリ操作のスムーズさ	必要な機能を使いこなすことができる。	必要な機能を探しながら作業をすることができる。	機能は見つけれないが、人を呼んで教えてもらえばやる事が出来る。	とにかく人を呼んでやってもらう。または操作を諦めている。	

市商マネジメントカ 5 ICT活用力

観点	step4 優秀な3年生程度をイメージ	step3 一般的な3年生程度をイメージ	step2 2年生程度をイメージ	step1 1年生程度をイメージ	得点
ソフトウェアの活用 Excelの活用	他のアプリケーションソフトとの併用活用	関数のネスト・データベースの活用	難かしい関数・複雑なグラフ	文字入力・罫線・簡単なグラフ・簡単な関数	
ソフトウェアの活用 Wordの活用	他のアプリケーションソフトとの併用活用	目的にあったチラシ・案内文書を作成できる	表作成・画像挿入	簡単な文章を作成できる	
ネットワークの活用 検索能力	キーワードを入力し、検索したい内容を的確に検索することができる	検索内容から必要な情報を書いているサイトを見つけることができる	複数のキーワードから検索することができる	検索機能を使うことができる	
ネットワークの活用 発信力	新しいネットワーク手段を利用し、活動することができる	得た情報が正しい情報が判断した上で、発信すべきか判断し発信できる	得た情報が正しい情報が判断し発信できる	得た情報をそのまま発信する	
資格取得 全商・ITパスポート	全商情報処理検定(ビジネス情報部門1級・プログラミング部門1級)ビジネス文書1級 3冠 ITパスポート合格(国家資格)	全商情報処理検定1級・ビジネス文書1級の内1つ合格	全商情報処理検定2級・ビジネス文書2級の合格	全商情報処理検定2級・ビジネス文書2級の内1つ合格	

【成果】

○ これまでに複数回実践してきた。10項目以上の観点から作成し、我々教員と生徒が同じルーブリック表を使って評価した。短時間で評価しなければならなかったが観点を細かく明確に作成できていた。私たちの評価と生徒の評価を後で突き合わせてみると、大きく逸れた評価もなく的確な評価がされていることに感心した。観点が具体的で明確であればブレも少なく、生徒も納得できる。

【課題】

△ 観点が抽象的になってはいけない。

⑥ 英語活用力について（3名1組×2班）

市商マネジメントカ 5 英語活用力

観点	step4 優秀な3年生程度をイメージ	step3 一般的な3年生程度をイメージ	step2 2年生程度をイメージ	step1 1年生程度をイメージ	得点
社会での活用	外国人観光客の通訳ができる	外国人観光客に地元の観光スポットを紹介できる	外国人観光客に道案内ができる	外国人観光客と挨拶や短い会話を交わすことができる	
プレゼンテーション	スライド作成や発表を英語で行うことができる。	英語でスライド作成し、時々つまりながらでも英語で発表することができる	英語でスライドを作成し、原稿を読んで発表することができる	英語でスライドを作成できるが、わからないところは時々日本語で発表する	
現代社会の横文字	社会一般的な横文字、ビジネスの分野の専門的な横文字について常に「日本語」も習得している。	社会一般的な横文字、ビジネスの分野の専門的な横文字について「日本語」も習得することが概ねできている。	社会一般的な横文字、ビジネスの分野の専門的な横文字について「日本語」も習得することが時々できている。	社会一般的な横文字、ビジネスの分野の専門的な横文字について「日本語」も習得しようとしている。	
検定取得	実用英語検定準1級	実用英語検定2級、全商英語検定1級	実用英語検定準2級、全商英語検定1級	実用英語検定準2級、全商英語検定2級	
略語	社会一般的な略語、ビジネスの分野の専門的な略語を常に英語の意味を理解して習得している。	社会一般的な略語、ビジネスの分野の専門的な略語を英語の意味を理解して習得することが概ねできている。	社会一般的な略語、ビジネスの分野の専門的な略語を英語の意味を理解して習得することがときどきできている。	社会一般的な略語、ビジネスの分野の専門的な略語を英語の意味を理解して習得することの有効性について説明できる。	
世界と日本とのつながり(ここでの他者とは海外の高校生のこと)	世界共通の課題解決に向かい、他者と協働して活動に取り組んでいる	世界共通の課題解決に向かい、自分の意見や他者の意見から解決策を提案できる	世界共通の課題解決に向けて他者に自分の意見をいうことができる	世界共通の課題解決に向けて、インターネットで情報を調べることができる	

市商マネジメントカ 5 英語活用力

観点	step4 優秀な3年生程度をイメージ	step3 一般的な3年生程度をイメージ	step2 2年生程度をイメージ	step1 1年生程度をイメージ	得点
紹介力	自分の活動を文章にして紹介できる	内容に不備はあるが長い文章で紹介できる	短い文章で紹介できる	ほぼ単語でしか紹介できない	
図表読解力	図や表をおおむね完璧に読み取ることができる(100~80%)	図や表をほとんど読み取ることができる(79~60%)	図や表を少し読み取ることができる(59~30%)	図や表をほとんど読み取ることができない(29~0%)	
長文読解力	長文の内容をおおむね完璧に読み取ることができる(100~80%)	長文の内容をほとんど読み取ることができる(79~60%)	長文の内容を少し読み取ることができる(59~30%)	長文の内容をほとんど読み取ることができない(29~0%)	
英語使用頻度	授業内で英語のみ使用している	授業内でほとんど英語を使用している	授業内で英語をあまり使用していない	授業内で英語を全く使用していない	
英語活用意思	どんな場面でも臆する事なく、英語が使える	多少の迷いはあるが、意欲的に英語が使える	周囲に促されて、英語が使える	英語を使おうとしない	

【成果】

- ルーブリック化をして評価に臨むことで負担の軽減につなげたい。また、教員が複数いても、分野が違っていても評価観点、評価尺度、評価基準がしっかりしていれば、同じ評価がしやすいこと、採点量が多ければ時短につながると感じた。

【課題】

- △ パフォーマンステストも、ALTの先生が評価したい力と日本人教員が生徒の実態を見て評価したい力が異なっており、基準作成に苦慮している。生徒がルーブリックで自己評価する場合は、授業の到達目標を評価観点にし、基準も分かりやすくする必要はある。

⑦ 察する力について（4名1組×2班）

市商マネジメント力 察する力

観点	step4 優秀な3年生程度をイメージ	step3 一般的な3年生程度をイメージ	step2 2年生程度をイメージ	step1 1年生程度をイメージ	得点
企画	合意形成ができる	まとまらないほどの意見が出る	自分の意見を形にできる	自分の意見を言える	
自主性(行動)	対象者の求める以上のことができる	言われなくてもできる	経験したことに関しては言われなくてもできる	言われたらできる	
説明	相手が迷いなく行動できるように伝えることができる	相手からの質問が無い様に伝えることができる	決定事項を理解し、自分の言葉に言い換えて伝えることができる	決定事項を伝えることができる	

市商マネジメント力 察する力

観点	step4 優秀な3年生程度をイメージ	step3 一般的な3年生程度をイメージ	step2 2年生程度をイメージ	step1 1年生程度をイメージ	得点
企画力	試行錯誤しながら改善することができる	展望を言うことができる	疑問を持つことができる	自分の意見を言うことができる (あれしたいこれしたい)	
説明できる力	データやグラフを用いて相手を説得させることができる	相手を説得させることができる	根拠を持って発言できる	自分の言葉で発言できる	
行動できる力	喧嘩にならず討論をすることができる	我慢することができる	感情移入(気づき)をすることができる	空気を読んで実行に移すことができる	
言われなくてもできる力	相手の感情をしっかりと受け止め、言葉の裏側の真意を押し返す	一般社会常識を身につけることができる	他者のことを想いやることができる	自分のことを想いやることができる	

【成果】

- 個人で試しに評価したものをグループで合意形成したり、市商マネジメント力についてグループで考えたりしたことができたのは、とても勉強になった。

【課題】

- △ ルーブリック評価は3回改訂すると良いものができる講師の先生がおっしゃっていたので、次の機会にやってみたい。各グループが作成したルーブリック評価を、今度は異なるグループで再確認し、行事等で活用したら良いのではないかと。
- △ 市商マネジメント力をルーブリックに当てはめていくと「観点」に対して重なることが多く、「評価」を出すことに難しさを感じた。
- △ やはりオリジナリティ(創造性)といわれるものに対しての評価をつけることは個人差が大きく、難しいということもわかった。そのようなズレをなくすためにも、観点を設定することが重要であり、難しいことであるとわかった。グループでルーブリック評価を作成した際にも、改めてその設定の難しさと、日頃からそこまで深く考えることなく、言葉を使用していたということを感じた。対象となる生徒の姿をよくイメージして、どうなって欲しいのかということを考え、授業でも活用できるルーブリック評価を作成したい。

⑧ 失敗から学ぶ力について（4名1組×2班）

市商マネジメントカ 7 失敗から学ぶ力

観点	step4 優秀な3年生程度をイメージ	step3 一般的な3年生程度をイメージ	step2 2年生程度をイメージ	step1 1年生程度をイメージ	得点
行動力	目標に対する課題について主体的に取り組み、他者とも協働し取り組むことができる	目標に対する課題について主体的に取り組み、他者とも共有し取り組むことができる	目標に対する課題について基礎的な知識や情報をもとに取り組むことができる	自分自身の目標に向けて課題を挙げて行動することができる	
挑戦する力	困難にぶつかっても逃げずに自分の役割を果たし、失敗してもその失敗を糧とできる。	困難にぶつかっても自分の役割を果たす努力をし、困難克服のために前向きにチャレンジし行動できる。	集団や他者との中で、自分の役割を見つけることができ、すぐに解決方法がわからなくても考え続け、行動することができる。	自分に自信を持ち、目の前の課題を自分のこととして好意的にとらえて、前向きに取り組める。	
振り返る力	自分の役割や意義を俯瞰して考え、自分の目標と関連づけて大局的に行動できる	自分の目標の達成のための行動を常に自分自身で見直して反省しながら、学び続け次の行動につなげて取り組むことができる	自分の目標に近づく方策を考え自ら行動することができる	自分を向上させるために、自分の目標と現実の差を見つめることができる。	

市商マネジメントカ 7 失敗から学ぶ力

観点	step4 優秀な3年生程度をイメージ	step3 一般的な3年生程度をイメージ	step2 2年生程度をイメージ	step1 1年生程度をイメージ	得点
計画性	成功だけでなく失敗を想定して計画する	成功だけを想定して計画する	おおまかに計画する	その場で行動する	
協働性	仲間の失敗を補うことができる	仲間の失敗に共感できる	仲間の失敗を気にかけることができる	自分の役割だけを果たすことができる	
行動力	自分の役割が終わっても他人の面倒もみれる	自分の行動に責任が持てる	言われなくても自分の事に対しては行動する	言われて行動する	
挑戦する力	固定概念を打ち破れるチャレンジができる	指示されなくても他者と協働しながら物事に挑戦できる	指示されなくても自らに目標を立てて挑戦する	指示されたことに挑戦できる	
振り返る力 (改善しようとする力)	課題を明確にして改善案を出し行動できる	課題を明確にして改善案を出せる	課題を概ね明確にして改善案を出せる	挑戦したことについて自ら振り返りができる	
情報収集力	校内に加えて校外の情報を収集して行動できる	上級生から情報を収集して行動できる	仲間から情報を収集して行動できる	教員から情報を収集して行動できる	

【成果】

- 探究活動など評価しづらい場面などでは大いに活用できそうだと感じた。

【課題】

- △ 評価項目のレベルが低いもの、低い設定になってしまうと効果は得られないと感じた。

【次年度以降の市商マネジメント力を測る指標策定に向けて校内教員からの意見】

本日の研修での目的は、市商マネジメントカ7つについてのルーブリック評価項目を策定することであったと思う。評価の観点、ステップアップの内容を設定しづらい力もいくつかあったように感じるの、そろそろ市商マネジメントカ自体を見直す必要があるのではないかと感じた。生徒たちの実態とあっているのかどうか、どのような姿を目指したいのかを研究する必要があるのではないかと感じた。

(2) AI時代の社会，人材，学校教育の役割について（12月5日実施）

全日制Ⅳでは、小宮山 利恵子 准教授（東京学芸大学大学院）を招聘し、「AI時代の社会，人材，学校教育の役割」と題し、研修を行った。

研修の記録の記述内容より一部抜粋をもとに、成果と課題に分けて記す。

【成果】

- 今回の研修で得たことの日一つは、評価についてである。作品を「質」で評価するよりも「量」で評価すると伝えた方が、よい作品ができたという結果は非常に興味深かった。理解度を評価するために「質」を問うことがよくあるが、「量」を問うことで生徒が文字数などを考え、考えを深化させることに繋がり、物事の本質を探ることができる「探究的な学習」にも繋がると考えている。
- これから生徒たちにつけなければならない力、将来に役立つ力がわかったような気がする。そのために必要な教師の「観察力」が大事。「教える」から「コーチ」へ、「コーチ=伴走する」肝に銘じたい。廃校の危機にある学校を立て直すための話では「軸があれば人は集まる」ということがすごく共感でき、自分の部活動に置き換えれば見直すべき点があることを大きく感じた。

そして次の「失敗」についての話。失敗には原因がある、その分析や振り返りをしっかりすることによって、その失敗が効果的な失敗であったかどうかになる。失敗するということは、一歩踏み出しているということなので挑戦させていくこと。

これから先の未来はどうかかわからない、現在でもコロナ禍、戦争、テクノロジーの目まぐるしい発達。はっきりとした地図はないので自分なりのコンパスや羅針盤を持って、「動きながら考える」ことが大事。失敗は「してもいい」ではなく「欠かせない」ものという考え方を生徒たちに持たせてどんどん失敗をさせながら成長を見守っていきたい。
- 1. 今の時代にあわせた取り組みを行う必要がある。→昔と今では時代が大きく変化している。自分自身が過去のままであると時代の変化に取り残されてしまう。常に世界の流れを見ながらアップデートをしていくことが求められる。

2. 自分自身が楽しみながら、失敗を見せながら行動することが必要である。→子どもが探究するためには、自由に考えさせるだけではいけない。教員自身が探究し、失敗も含めて成長することが求められている。
- 今回の研修会の序盤でこれからの子供たちの未来に「終身雇用」はないという話があった。人生100年時代と言われ、健康年齢も伸びている現代で企業の平均寿命は20年と考えると、終身雇用の時代ではないということも納得できる。では、これからこの時代を生きていく生徒たちにとって必要なスキルは何か。技術か？資格か？考えていたが、研修を通じて「学び続ける力」であるということに気付かされた。さらに、ITやAIなどの最新技術を経験させ身に付けさせることが強い武器になると考えていたが、技術だけではなく企業家精神を持つことが大事であると感じた。そして高知商業なら企業家精神を育む環境を作ることが可能であると思う。現在、情報マネジメント科では川崎先生によって、日曜市を調査しアプリ開発をするという授業をおこなっている。生徒たちは実際に日曜市を見学し、さらに買い物もして、出店者に話を聞き、調査を行った。出店者が困っていること、改善したいこと、そして生徒本人が消費者となり、感じたこと、困ったこ

と、改善してもらいたいことを考えさせている。もしかしたら出店者として日曜市に参加してもらえないかもしれない状況まできている。これはまさにフィンランドの ICT 教育で言っていたアナログではないと養えない五感であると思う。生徒たちは消費者になり、出店者になり、アプリ開発者になることでさまざまな角度から物事を見ることができる。これをきっかけに、さらなるステップに進む生徒も出てくるのではないだろうか、と考えると“ワクワク”する。小さな活動ではあるが、先生が仰っていた“マージナルゲインの法則”を信じ、このような小さな施策を重ねることにより、大きな成果を得ることができるのではないだろうか。そしてそのためには気長につきあえる環境も必要であるし、教員自体の学びも必要であると実感した。

- 本日の研修で一番印象的であったことは、「私たちが子どもたちにできることは環境づくり。子ども自身に小さな選択肢を持たせる機会を多く創り自分で選択させる。」という部分であった。仕事でもプライベートでもそのことを頭に入れ、より良い環境を提供できるよう心がけていきたい。高知という特性も活かしながら地域に目を向けた教育活動ができればと思う。そのために自分の価値や信用を高められるよう、今日教えていただいた5つのステップを実行していきたい。
- AI により、教育、教員の役割が変わる時が来ている。以前から言われてきた探究への取組が、生徒をのばすために必要になってきていることを確認できた。そこではアナログがまだまだ必要であることがわかった。現在、多くのことをアプリを使用して行っている。しかし、新しいことに取り組むには手書きで、思考の軌跡を紙面に残していくことが必要である。
- 今後は探究・探索学習をしていないと大学に合格できない
これから先生に必要なスキルは「観察力」
動きながら考える（40%くらい考えがまとまったら動いてみる）
失敗時に表面上の原因を解決しようとしてもダメ（もっと深いところに原因がある）
成功には失敗の量が大事である（同じ失敗を何度も繰り返すということではない）
- 「学んでいればチャンスがある」「人生のチャンス、弱い繋がりからが8割」といった言葉から、過去の経験や頭に残ったことから道が開けてくる。広く浅く様々なことに触れさせたい。五感を使ったリアルな学びの重要性、首都圏の学生は消費者視点しかないが、地方は生産される物を直に見ることができる。「これからは地方の時代」といった言葉から、理論的な学びと高知県でいわゆる「実学」を合わせて、商業高校の学びとさせていきたい。
- 先日修学旅行で訪問した IU 情報経営イノベーション専門職大学での学校紹介・実践内容と重なる部分があり、どのような関係があるのか興味を持った。
これからの AI 時代を生き抜く力を育てるためには、五感を使い探究・探索型の学習に取り組みせ、試すと失敗を体験させることが必要で、そのためには教師が観察力をもってコーチしていくことが大切であることを学んだ。教材として地方に材料が多く、身近に多くのチャンスがあるとのこと。本校の取組は継続させ発展させていきたい。また、物事の一步を踏み出す際、間違った方向に進まないように世界の動きを見ること、これからは一人一人がコンパスを持ち、動きながら修正を加えていくことが求められる、ということが印象に残っている。

- 自分自身もそうであるが、失敗することを恐れてしまう気持ちは持っており、出来ればしたくない。だが、成功のみを経験することと、失敗を繰り返して得た成功体験では得られた経験値が違ふと考える。私は理科の教員であり、たくさんの実験を経験してきた。失敗を繰り返し、試行錯誤した上で必要なデータを取り考察していく。その上で目的物を得られた経験から探究心や好奇心の重要性を学んだ。この経験を生徒たちにも体験して欲しい。失敗することは悪いことではなく、一歩先に進むためには必要なことであり、経験すべきことであるということを経験という教科の面から生徒に伝えていきたい
- 今後の学びのスタイルとしては知の深化と知の探求が効果的である。社会はどんどん変わるので学校教育も変化する必要がある。高知商業では探求学習の重要性を以前から感知し、カリキュラムの中にも問題解決学習を取り入れてきた。しかし、まだまだ変化に対応する必要があるのでカリキュラムの検討をしていく必要がある。例えば、知の進化に関しては、スタディサプリのようなものを使用して、効率的に学習して時間を短縮する。またアントレプレナーシップ教育のような、起業家精神を持ち、積極的に社会と関わっていく活動が実学として学びが多い。短期的に取り組むこととしては、自分の教科で教えない授業、生徒たちが、自ら考えて、結論を導けるような仕掛けのできる指導案を考えて実践していきたい。
- これからの教育は「知の探究」と「知の深化」である。今後、大学入試などでは、偏差値型ではなく、これからどのように社会に貢献していくかということについてエッセイを書くことが求められている。学びの中で地域との連携することの重要性や、自分自身の体験について書くために「探究」や「探求」が必要なことを学ぶことができました。生徒会活動などでは、生徒が地域の方とともに「探究」を行なっているが、失敗体験も含めて、生徒が探究活動の中での学びをまとめたりつなげたりしながら、自分の言葉で話したり書くことができるように教員もサポートしていきたい。

【課題】

- △ 明確な地図がなくなったともいえるこの時代に「コンパス」を持って、「動きながら考える」という視点もぜひ持つておきたい。「失敗から学ぶ」というマネジメント力、これは、チャレンジをするといこと。失敗にはいい失敗と悪い失敗があるといことを岡崎前校長が仰っていたが、時々、それが理解されていないのではないかと感じる場面がある。「失敗から学ぶ」の意味をしっかりと教えていきたい。
- △ 教師に必要な観察力とは”一人一人の生徒をこれまでよりも細かく見れる、見る必要がある“という話を聞いて、現在仕事の多忙化により生徒のことをゆっくり見られるのか不安である。
- △ 私たちが、これからの社会を生き抜いていくための「課題発見解決力」や「発信力」「考え、行動する力」などを生徒に身につけさせる教育をしなければならぬと改めて実感し、自分の意見や考えを英語で表現できるようにするために、これまで以上にアウトプットする時間を設定しなければならぬと思いました。
- △ 教員をこれからも続けていくのであれば、今後予想される教員の役割の変化に順応する行動が求められるということである。
- △ 現在の職場は異動が少ないことも理由の一つではあるが、今年度外（高知大学次世代地

域創造センター内地留学)へ出て自身の知識が時代遅れということを感じたので、ここで働きながらも外へ目を向けること忘れないようにしたい。自分自身の知識をアップデートすることを忘れないように心がけたい。

- △ 研修の最後の「好きでないことを嫌々やって成功するほど世の中は甘くない」という言葉を聞いてその通りだなあと思うと同時に嫌なことを避けて通れない時にどのようなマインドセットで考え方を変えて取り組むべきかを考えさせられた。
- △ 情報のアップデートについてである。学び続けなければ今後働くことが難しくなるとよく言われていたが、実際に行動にできていたかという点を振り返ると、全く行動できていなかった。忙しいからと言い訳をして、学校外のことを授業に活かすことが全くできておらず、情報を集めるアンテナを広げないといけなさと感じている。コロナ禍ではあるが、様々な情報を集め、多様な考えがあると自分の視野を広げるためにも、高知だけを見るのではなく、世界に目を向けないといけなさとすることを強く感じた。
- △ 時間の使い方も考える必要がある。授業のように決められた時間では結果を求めることは難しくなる。探究における時間と成果について考えていく必要がある。生徒の変化を見ていくための手段、ルーブリック、個人面談などを考え、試行する必要がある。
- △ 「シンギュラリティ」「レアカ」「ハイテックハイ」「アントレプレナーシップ教育」「マージナルゲインの法則」など、初めて聴くものが多かった。また、最新のデータを入手し、常に自分の中でアップデートしていく必要があることを学んだ。今後、短期的には、まず上にあげたキーワードを調べて、自分の職務に当てはめて研究すること、そして、講師の先生が取り上げてくださった『失敗の本質』をはじめ、数冊の書籍を読み、研究することを行う。
- △ 「知の深化」と「知の探索」という点において、理科ではまさに探索がメインとなる学問であり、自分自身もその学びができていたと思っていた。しかし、教科書を基にした知識技能を問うテストのために、探索の最終地点が知識となっており、正解のない適応回答力を身に付ける学びができていないのでは、と省みる機会となった。実験環境が整っていない、授業単位数が少ない、そういった条件を自身の枷としてしまい、生徒たちに経験を積ませる、失敗をさせる学びが疎かになっていた。研修の中にもあった、高知県だからこそ、地方だからこそできる学びはサイエンスとも確実に繋がりうるため、これまでの理科教育ではなく、高知商業独自のサイエンストライアルを作っていきたい。
- △ 内容については全体で共有しながら進めていかないとうまくいかないのではないかと思う。誰が進めていくのか段取りや期間などカリマネなどで検討する必要があると思う。そうしないと結局個別に意見を言うだけで現状が変わる事はない。
- △ 社会が変わることに伴って教育現場も大きく変わることでできるよう学校あげてのカリキュラム変革が必要だと感じる。そのために、教員間での協議する時間の確保が急務である。
- △ 講師の先生のお話の中で「how to」を教えることは生徒の創造力を失わせるという言葉があった。どのようにするかを教えるのではなく「どうすれば～できるようになるか」などの課題を提示し、生徒自身が納得して答えを見つけることができるまで、「待つ」ことや「発問」することが必要だと改めて確認することができた。また私自身もその方法について探究していきたい。

5 全国プラットフォーム事業研修への参加

(1) 第1回コーディネーター・組織合同研修会（8月19日実施）

参加者	研修内容
東森 歩 (CN) 久保 智司 (管理機関) 掛水さおり (高校)	<ul style="list-style-type: none"> ・基調講演「コーディネーターの可能性」 ・自己紹介と対話 ・アンケート結果と現状分析 ・事例研究「隠岐島前高校の普通科改革」 質疑応答 ・自校の課題分析 ・ロジックモデル作成について

(2) 第2回合同研修（11月25日午前実施）

参加者	研修内容
東森 歩 (CN) 掛水 さおり (高校)	<ul style="list-style-type: none"> ・プロジェクトを成功させるチームの条件 GRIP ・ロジックモデルの再構築 ・事例紹介 大樹高校 伊達開来高校 隠岐島前高校 大槌高校 ・他校と一緒に改善策を考える ・自校のメンバーと改善策を考える。

(3) 第2回高校関係機関研修（11月25日午後実施）

参加者	研修内容
三嶋 香世 (管理機関) 久保 智司 (管理機関)	<ul style="list-style-type: none"> ・CNの業務内容アンケートとヒアリングによる分析 結果報告 ・自組織の現状報告 ・島根県教育委員会のCN活躍エコシステム ・エコシステムを構築するために何が出来るか

(4) 第2回コーディネーター研修（11月30日実施）

参加者	研修内容
東森 歩 (CN) 成瀬 孝治 (高校)	<ul style="list-style-type: none"> ・CNの業務内容アンケートとヒアリングによる分析 結果報告 ・教員からみたCNが学校に入ってくる意味 ・大学の教育リソースを高校現場につなぐとは？ ・福島県立ふたば未来学園の教員とコーディネーターの協働 ・CNと高校教員がよりよい役割分担と協働体制を作るために何が必要か？

(5) 第3回高校関係機関研修（2月27日実施）

参加者	研修内容
久保 智司（管理機関）	<ul style="list-style-type: none">・今年度事業の事業運営組織としての主な取り組みと成果・課題点<ul style="list-style-type: none">→ GRIP(ゴール, 役割分担, 人間関係, プロセス)など組織として取り組んだ部分を抽出して発表→ 生徒の成果ではなく, チームとしての取り組み, その成果と課題を整理→ コーディネーターの受け入れ, 活躍環境の整備について・次年度計画の骨子

(6) 高校コーディネーター全国フォーラム（3月10日実施）

参加者	研修内容
東森 歩 (CN) 成瀬 孝治 (高校)	<ul style="list-style-type: none">・高校コーディネーター全国プラットフォーム事業の報告・事例報告・参加者による対話

(7) 第3回コーディネーター研修（3月11日実施）

参加者	研修内容
東森 歩 (CN)	<ul style="list-style-type: none">・コーディネーターどうし, 学校どうしのつながりづくり・今年度事業のコーディネーターとしての取り組みと成果・課題点

V 次年度に向けて

I 令和4年度の取組まとめ～次年度への推進課題～

本冊子5ページにお示ししているように、「II 令和4年度 研究開発の概要」の「1 令和4年度研究開発実施 計画」の「(7) 3ヶ年の実施計画の概要」において、取組1年目の令和4年度について、次のように計画していた。

1年目：令和4年度

- ① 土台づくり：校内組織体制の準備
「カリキュラム開発基礎」となる1年間の講座の流れ作成
- ② 市商マネジメント力の調査・現状分析
 - ※ ルーブリック評価基準の作成・実践
 - ※ ルーブリック評価の改善のための教職員研修実施
- ③ 各教科での学びを活用した課題解決場面から得た学びをプロジェクションマッピングで表現する企画・運営を通して、これまでに培った市商マネジメント力との関係を分析・検証
- ④ 市商マネジメント力の調査・現状分析から得たエッセンスを生かした教科等横断的なカリキュラムを設計
 - ※ 例えば1年次（1時間）2年次（1時間）3年次（2時間）など3か年通した学校設定科目「市商学（仮称）」のカリキュラムを考える
- ⑤ 課題研究発表会及び市商地域創造プログラム報告会を開催

上の計画に対し、①～⑤の5つ全て取り組むことができた。研究として重要な②～④について、運営指導委員会からの指摘13点と教職員からの意見1点の計14点を「次年度への推進課題」として整理しておく。

また、「市商創造学」及び「組織の刷新」について現段階での整理を記載する。

【次年度への推進課題】

- (1) 大事なものは、自身がこの学習によって、どういう力が付いたのか付かなかったのか、ここが足りない、だから自らこんなふうに学習しようという行動が変わるのが評価。これは先生の方もそうだ。子供だけではなく、どういう学習を次に作れば、もっと創造的なクリエイティブな学習になっていくのか、また、深めていけるのかを高校生になったら一緒に作るんだというところに至るための評価であって欲しい。
- (2) パフォーマンス評価は、各教科の中にもあり、それぞれが単発ではなく、自分を形成するものというように子供が受け取らないとあまり意味ない。分野横断していくことで、子供の中で統合されていかなければならない。どういうパフォーマンス課題に取り組んでいくのかということが、カリキュラムマネジメントとして、年度の最初に整理されていないと、イベント型の羅列になる。

- (3) 学校では、マネジメントを大事にされている。先生方は、商業のマネジメント、情報マネジメントとはどういうことなのかをもう一度振り返り、学校として生徒にどういう力を身に付けさせたいのかということから、評価を考えて行く必要がある。テーマを選んでどういうふうに進めていくのかというグランドデザインが必要である。
- (4) 課題の設定にもう少し時間をかけていけない。課題の設定のレベルを上げていく必要がある。そこに時間をかけていくことが必要である。教員が、何度も問いかけ、生徒たち同士でも、発問や課題の設定の質を上げていく訓練に時間をもっとかけていくことが必要。誰のために、何のためにかということである。
- (5) 発信力ということも心がけていかないと、外部からの評価が子供たちを変えるし、教員の意識を変える。内部で論議して、意識を変えいくのはなかなか難しいが、外部に発信することによる、外部からの力というのは非常に大きいと思う。どのように発信力を持ってやっていくのかということが重要な意味を持っている。これが子供たちを変えるし、学校も変えていくので、重要視されたらどうか。
- (6) お題を見つけるということが苦手なのかなと思った。題が出てれば解けるのだが、問題がなくて問題を見つけてと言われると、ざわざわするという感じがある。最初にお題をこちらが用意しすぎるのではなく、あまり与えずに自分たちで考えて決めていけるような、その場づくりが必要。
- (7) もったいないのは、パターン化したものの中で訓練をすることが多かったのではないか。そこで、まず的確に会話をしていくこと。これが学びを深める、探究していくときの基礎であるが、言語を獲得することで盛り上がるのである。感覚でワーツになっていて、常にそのもやもやしたワーツとなったものを、的確に相手に伝えて引き出すというところは訓練である。ここが少し弱い。生徒たちは、一緒にやっていると、周りの大人たちから言語を獲得していく。
- (8) ただ今度は、その先があって、イノベーティブかということである。ここが今からの社会、ものすごく大事なことで、0から1ではなく、今までにあることであるが、見方を変えたり、価値提供するなど、物を作る時も売るときもそうである。新たな価値提供や、自分だからこそできるというものをきちんといろいろな人達と出し合っただけで形にするという時間。ここが、単に生徒だけに任せたらできないのである。社会人もそうである。やはりそういうことに知見がある人や、取り組んでいる人たちが一緒に組み合わせることでハツとする。そして作っていく。この体験ができてないのではないかと思う。
- (9) 問題と課題が混在していて、何に取り組むのかということが明確になっておらず、先生方が指導してあげないと、生徒たちが全然違う方向にいつてしまう。やはり、

その捉え方を先生方も、いろいろな情報、新しい情報を、新聞や雑誌から集めて、先生も生徒たちと一緒に、情報を用いながらどういうところに問題があるのか、もし解決するとしたらどうなのかと考えながら取り組んでいく必要がある。

(10) やはりそのデジタルというところが、すべての基礎になり、大学改革がものすごく急がれており、文系理系関係なく、データサイエンス、数理について、すべての学生がやらないといけないということで今急がれているが、大学進学する子供たちはそういう変化に関係してくると思うが、そうではない子供たちが、社会に出たときにものすごく苦勞する。

(11) ICTも古くて、もうインフォメーションではなく、ベースはデータである。工業も。行政も。先ほどから話題に出ている課題を設定する力とデータがものすごく関連してくる。両方が分かっていると仕事ができない。

(12) プログラミングはすでに AI でできる。それならばもっと上位をいく。上位とは、どんなデータを、何のために使うのかという本質は変わらない。何のためにやるのか、何の課題をやることでどんな価値を生み出すのか。それが自分のことだけではなくて、できればその社会、身の回りや社会を変える課題を解決しながらみんなが豊かに暮らしていく、そういうことは繰り返し小さいうちから考えてないといけないと当たりをつける力は生まれてこない。

(13) すべての科の中で ICT の先を实践されて他の学校が参考にしていけるように、ぜひお願いできればと思う。もう少しすると多分 VR の中で仕事をしていくようになっていく。世界は、そこまで来ている。ひょっとすると今の子供たちの時代は、見た目の問題ではないところで活躍するという世界も出てくるのではないかということを考える。私たちの感覚では少し理解できないけれども、そこに一つの経済ができることは間違いない。ここへ行ったらものすごく活躍できる、世の中引っ張っていきけるってことも出てくるので、何かそんなこと許せる大人側であらなければいけないのかと思った。

(14) 研修での目的は、市商マネジメント力7つについてのルーブリック評価項目を策定することであったと思う。評価の観点、ステップアップの内容を設定しづらいかもいくつかあったように感じるので、そろそろ市商マネジメント力自体を見直す必要があるのではないかと感じた。生徒たちの実態とあっているのかどうか、どのような姿を目指したいのかを研究する必要があるのではないかと感じた。

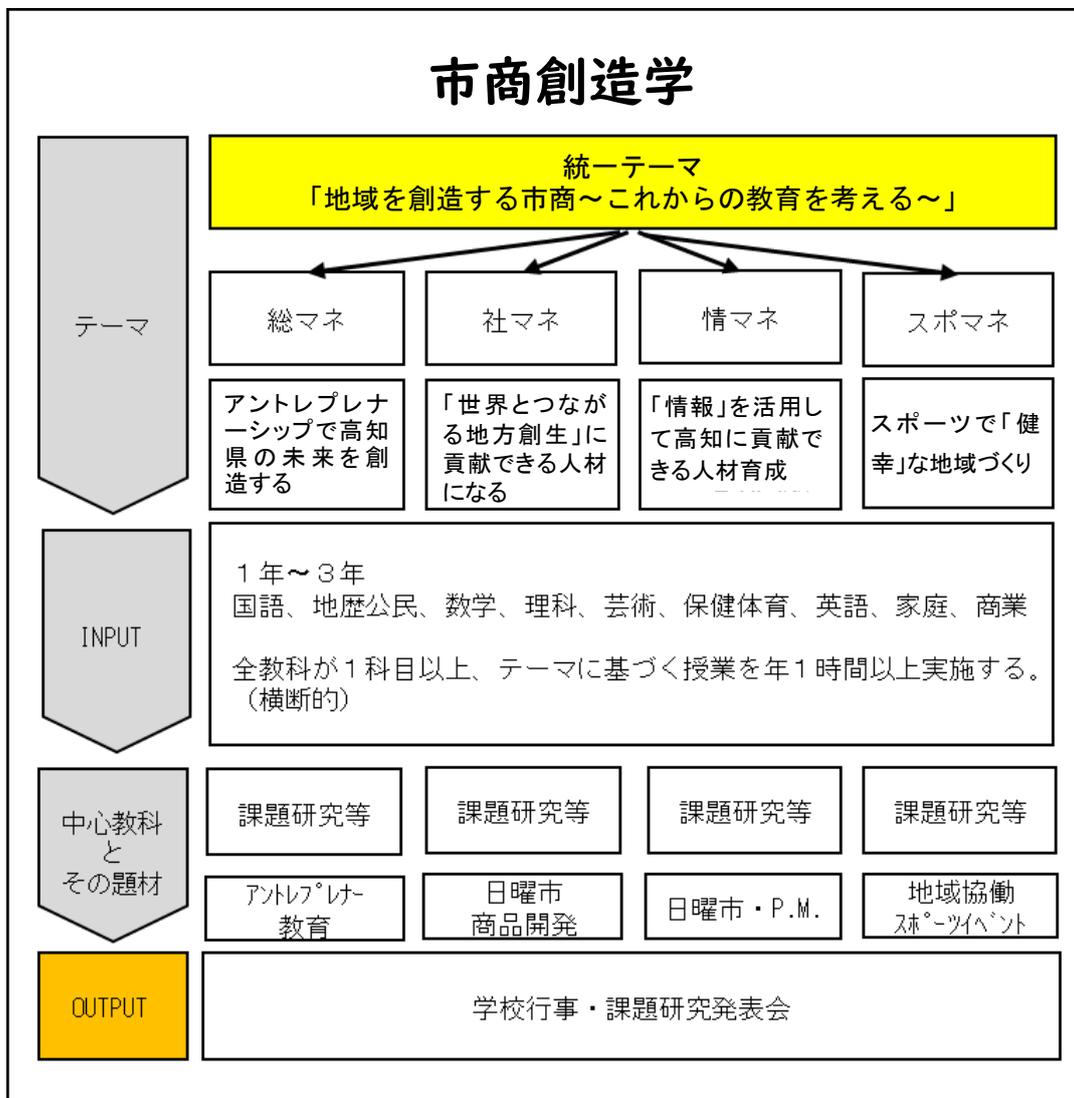
2 事業完了報告書（様式第6）の事業結果説明書（別紙 イ）

令和4年8月12日～令和5年3月31日の契約期間において、実施した内容をまとめた「別紙 イ」は巻末の補足資料に掲載する。

3 市商創造学

令和4年度の取組では、科の特色ある活動を軸とした外部講師による授業支援やコーディネーターによる円滑な授業運営について成果を得ることができた。将来的には、中心教科にかかわる担当教員が、コーディネーターの力をもつことが、新時代に対応した高校教育の1つの形だという示唆をいただいた。加えて、そのためには、一部の教員が頑張っている活動にしないためにも、学校全体での生徒育成に向けた取組、または動きにしていく必要がある。そのための手立てとして、令和5年度では、科コースの特色ある教育活動に対して、校内からの協力体制として全教科が関わって教科等横断的な学習の実施を計画し実施する。これに加え、令和4年度の成果であった外部機関との連携も継続し、高知商業におけるコンソーシアムづくりの基盤ともする。

案は以下の通り。



(I) 学科・コースの特徴的な教育活動

学習・実践とそれらに関連して取り組む教科 教育や特別活動や課外活動を総称して「市商創造学」とする。取組内容は、次の通り。

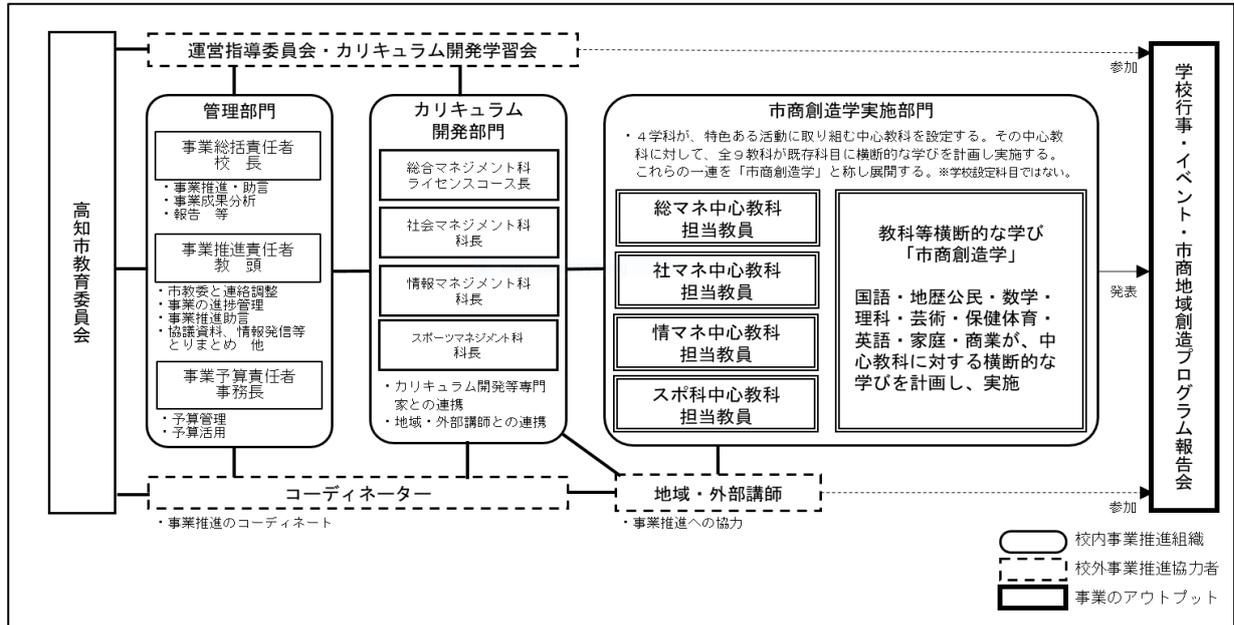
- ① 4科それぞれが、統一テーマをもとに、科のテーマ、教育活動を設定する。
- ② 統一テーマと4科のテーマを、9教科に示す。
- ③ 9教科それぞれが、1科目以上、統一テーマや4科テーマに関連する授業を年1時間以上計画する。(学科別、学科共通は問わない。)計画は、シラバスに記載する。

(2) テーマについて

- ① 統一テーマ「地域を創造する市商」
- ② 4学科コースのテーマ
 - ・ ライセンスコース…アントレプレナーシップで高知県の未来を創造する
 - ・ 社会マネジメント科…「世界とつながる地方創生」に貢献できる人材になる
 - ・ 情報マネジメント科…「情報」を活用して高知に貢献できる人材育成
 - ・ スポーツマネジメント科…スポーツで「健幸」な地域づくり

4 組織の刷新

学校組織としての活動にしていくために、次のように組織の刷新を図り、学校全体で取り組むカリキュラム開発として効果的な組織運営に取り組みたい。そのためにも次年度当初に、組織体制に基づいたロジックシートの見直しならびに刷新も図る。



事業結果説明書

1. 事業の実績

(1) 事業の実施日程

事業項目	実 施 日 程						
	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
運営指導委員会		1回				1回	
研究開発に係る視察		1回	1回				
研究開発に係る研修		1回		1回			
情マネ科3年研究開発に係る授業(課外除く)	0回	5回	6回	2回	6回	1回	
コーディネーターの月間活動時間(分)	480分	1110分	2410分	370分	1030分	880分	390分
情マネ2年研究開発に係る高知市研究員研究	高知大学次世代地域創造センター内地留学中の研究員による研究						

(2) 事業の実績の説明

① 運営指導委員会

全ての運営指導委員(5名)に出席いただき、年2回開催し、専門的見地から本校の取組について指導・助言をいただく機会とすることができた。

② 研究開発に係る視察

- 10月6日高知県立大方高校「地域との協働による高等学校改革推進事業」の視察を行った。高知商業高等学校長、運営指導委員、管理機関指導主事の3名が視察訪問した。そのほか、本校情報マネジメント科2年生13名と1年生4名、引率教職員3名が当日の「大方高校アイデアソン」に参加した。
- 11月18日(金)～19日(土)静岡県立掛川西高校と掛川工業高校の共同企画「掛川城・御殿でのプロジェクトマップ」のリハーサルについて本校教員4名と高知市立高等学校コーディネーターが視察。本番は19日(土)であり、18日(金)は掛川の両校生徒によるプロジェクトマップのリハーサルを視察した。

③ 研究開発に係る研修

○ ルーブリック評価入門

10月19日に、全日制教職員62名を対象に、悉皆研修を行った。講師には、佐

藤 浩章 准教授（大阪大学）を招聘し、「ルーブリック評価入門」と題し、市商マネジメント力を測るためのルーブリックの作成にあたり講義を受けた後、4～3名を1組とし、16グループに分かれて市商マネジメント力のルーブリック評価表を作成するグループワークを行った。

○ AI時代の社会，人材，学校教育の役割について

12月5日に、全日制教職員62名・定時制教職員7名の合計69名を対象に、悉皆研修を行った。講師には、小宮山 利恵子 准教授（東京学芸大学大学院）を招聘し、「AI時代の社会，人材，学校教育の役割」と題し、これから先の社会の変化を見据えた人材育成について研修を行い、商業高校が得意とする社会とつながった取組についてご指導いただいた。

④ 情報マネジメント科3年研究開発に係る授業

- ア 活動主体 情報マネジメント科3年生 33名
- イ 授業 「課題研究」「ビジネス情報管理」で実施
- ウ 授業協力：高知市立高等学校コーディネーター
東森 歩 コーディネーター（ファン度レイジング・マーケティング代表）
- エ 外部講師：プロジェクションマッピング制作ならびにイベント運営の指導
吉川 牧人 先生（静岡県立掛川西高等学校教諭）
富永 宏 先生（静岡県立掛川工業高等学校教諭）
石川 勝敏 氏（HAL Labo 代表）

⑤ コーディネーターの月間活動時間（分）

高知市立高等学校コーディネーターの雇用形態はパートタイム会計年度任用職員とすることとした。期間については、令和4年9月1日から令和5年3月31日までとし、文部科学省との契約日（令和4年8月12日）以降で準備し、2学期の開始に合わせて任命を行った。コーディネーターは、「活動予定表」及び「活動報告書」により、日々の活動内容を学校長に提出・報告しており、合計活動時間は3月に参加予定の研修を含め、合計6670分（112時間程度）の見込である。

⑥ 情報マネジメント科2年研究開発に係る高知市研究員研究

- ア 対象生徒 情報マネジメント科2年生 パソコン活用応用類型18名
- イ 授業 「マルチメディア」で実施
- ウ 授業助言：高知大学次世代地域創造センター 地域DX共創部門
川村 晶子 特任教授・学長特別補佐（高知大学）
森 和美 氏
- エ 外部講師
高知市商工観光部産業政策課街路市係
富士通ラーニングメディア
高知新聞社

高知商業 高知城追手門 プロジェクトのマッピング

令和5年 2月 12日 (日)

● 時間

18時30分～20時
(3回投影予定)

● 場所

高知城追手門
※雨天の場合中止・延期なし



ホームページ



Instagram

高知商業の
情報マネジメント科が高知城の
追手門でプロジェクト
マッピングを行います！
是非見に来てください！
無料でご覧いただけます！

回答者のお名前：3年7ホーム（ ）番 名前（ ）

文部科学省 新時代に対応した高等学校改革推進事業（創業的教育方法実践プログラム）

市商地域創造プログラムにおける 情報マネジメント科3年生への振り返りアンケート

情報マネジメント科3年生の皆さん、本当にお疲れ様でした。本日は、今回のプロジェクト・マッピング（以下P.M）に関わる取り組みを今後に生かしたく、振り返りアンケートへの回答をよろしくお願いします。

選択肢がある場合は文字を○で囲んで下さい。記述の場合は□枠内への記述をお願いします。

質問1 P.M.における学習・活動において、新しい学び（Canva等）や未知の役割（広報、誘導等）に取り組むなど、様々な挑戦がありました。その中で、新しい学びをどう身につけるのか、未知の役割にどう取り組むかを考えて、個人またはチームで取り組むことができましたか。

はい いいえ

質問2 P.M.の学習・活動において、高知の魅力や特産、またはイベント運営の仕方等、多様なことについて学ぶことができたという実感はありますか。

はい いいえ

質問3 P.M.の学習・活動において、市商マネジメント力が、取り組み前に比べ伸びたと感じますか。

はい いいえ

質問3：はいと答えた方 P.M.の学習・活動で、とくに身についた力はどれですか。（複数回答可）

コミュニケーション力 課題発見・課題解決力 プレゼンテーション力 講義理解力
ICT・英語活用力 察する力 失敗から学ぶ力

質問3：いいえ・わからないと答えた方 その理由について記述をお願いします。

質問4 P.M.における学習・活動から学んだことや生かしたいこと等について感想をお書き下さい。

以上となります。ご協力ありがとうございました。



文部科学省指定事業

令和4年度「新時代に対応した高等学校改革推進事業(創造的教育方法実践プログラム)」

市商地域創造プログラム研究開発実施報告書(第1年次)

発行年月 令和5年3月

発行 高知商業高等学校

編集 高知市教育委員会学校教育課

〒780-0947 高知市大谷6番地

T E L : 088-844-0267 (代表)

F A X : 088-844-3693

E-mail : kochisho-h@city.kochi.lg.jp

エル



积存反赔